

命令！武器カラ隣人ニセヨ！

アカサ0407

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

主人公である提督が前任がやらかして来たことの尻拭いをして  
いって人間への信用をなくしていた艦娘達に信頼を取り戻し、町の住  
民達も集まり海軍の人達に艦娘は武器ではない！良き隣人だ！とわ  
からせるために奮闘する話です。

ツイッターのアカウント作りました。こちらからどうぞ！

@sWmpUASBH8aE8QS

## 目次

鎮守府では前任がやらかしたそうです！	1
指令書は無茶振りがすぎるようです！	3
やっぱり鎮守府は危機的状況です！	5
天龍は新任提督に物申したいそうです！	9
艦娘達は新任提督を品定めしていたようです！	11
妖精さんたちが新任提督のために奮闘したいみたいです！	15
第六駆逐隊が執務室に突入するようです！	19
新任提督はお酒を酌み交わすようです！	23
艦娘達は新任提督に勝利を捧げたいそうです！	26
大本営の第一艦隊は新任提督を気に入っているようです！	28
艦娘達は彼の指揮に驚きを隠せないようです！	32
お酒は二十歳になってからです！	37
新しく建造された子は不調のようです！	41
研究員はあの子を引き取りたいそうです！	45
あの子は思い悩んでるそうです！	50
第六駆逐隊は釣りに行くそうです！	54
市長さんがやってくるそうです！前編	58
提督との絆〜金剛編前編〜	62
提督との絆〜金剛編中編〜	67
提督との絆〜金剛編後編〜	70
浜風は提督さんを尾行するそうです！	75
青葉見ちゃいました！提督と妖精さん達のオーケストラです！	

鎮守府では前任がやらかしたそうです！

「こんな私に移動命令ですか？」

季節は春、桜が年々より少しずつ咲くのが遅くなってゆくこの頃私は大本営よりとある鎮守府に提督として着任しなければいけなかった。

「その通りだ。しかし君にはそこで艦娘達の心のケアなどをしてもらいたい。」

その大本営の一室で私の上司である杉田中将から言われた。

「その鎮守府はブラック鎮守府と言われてたところだな

前任がしでかした尻拭いを君にしてみらうことが決定した

君は妖精とも話せるのだから？」

「はあ…たしかにお話なども出来ませんが私には荷が重すぎると思いますが…こんなただの凡人の私に…」

私はまだ海軍の育成所にて卒業したばかりだが成績はそれほど良いというものでもなかった。

「成績は見させてもらったし、なぜ君が成績を悪くしてしまったのかも知っている。だからこそ君にこのブラック鎮守府を立て直してもらいたい。」

「わかりました。命令ですからね。やるからには私なりに頑張ってみようと思います。」

「そう言ってもらえて助かるよ。では3日後に君の家に迎えをよこすからそれまで家で身支度を整えててくれたまえ。」

「了解しました！」

しかし三日後か…早く帰って今日は寝ようかな…

そう思っていた帰り道私は知り合いに出くわした。

「あれ？先輩じゃないですか！久しぶりです！」

「やあ…久しぶりだね。君はどうしてここに？」

「実は私！大本営の経理課に入ったんですよ、今はこれから資料を

上司にもらいにくいところだったんです！

先輩はどうしたのですか？」

「ああ、とある鎮守府で提督やることになったんだよ。これから家に帰って身支度を整えるつもりだよ」

「すごいじゃないですか！でもあんまり気乗りではないですねえ…

そこに何かあるんですか？」

「そうなんだよ、前任のせいでブラック鎮守府になってたらしくてそこを立て直さなしてからじゃないといけないんだ。」

「それは大変ですね、けど先輩なら大丈夫ですよ！あなたなら艦娘達を元気にできますよ！」

「ありがとうございます…少しやる気が出て来たよ。じゃあこれで失礼するね、今度ご飯でも食べよう」

「ほんとですか！やった！先輩のおごりですね！」

「えっ…まあいいか…じゃあね」

大本営から家までは自転車通勤で行ってたので（最初はこれの理由で海軍に入った）自転車で帰ってる間に少しだけ海からの景色を眺めた。

そこには綺麗な暁があり、自然とこの海を永遠に見れたらいいなあと思いはじめていた。

家に帰りご飯を食べて風呂に入っていざ眠ろうとした時にふと思った。

そういえばどこの鎮守府かきいてないや

指令書は無茶振りがすぎるようです！

なんだこれは…

杉田中将に頂いた指令書とその場所の資料を見ていた

「これは…ひどいな…」

内容ははつきり言って酷かった。不思議と腕に力が入ってしまっ  
た。

憲兵達への賄賂、艦娘達への扱い方と酷さ、多くはないが艦娘の轟  
沈など…これだけでかなり怒りを感じた。

そのことに気付いた町の人が大本営に伝えて大本営の憲兵達が抜  
き打ちチェックによつて横暴が露見したようだ。

かなりケチみたいで弾薬がない状態の出撃などはしよつちゅう  
だったようだ。

おそらく艦娘達は人間を信頼してはいないと簡単に判断できた。

「どうしたのー?」

「かおがこわいよー」

「なにもてるのー?」

「ん?提督になるからその鎮守府の資料を見てたんだよ。まあ内容  
が酷くてイラついちゃったけどね」

この三人?は妖精さんだ。学生の時に試験から帰ってきたらすで  
にいたのである。ご飯はお菓子なのでそんなに費用はかからないの  
で一緒に暮らしていた。

「ていとくになるんだー!」

「ついにわたしのほんきをみせつけれるぞー!」

「まかせてー!」

「一緒に行くのか?まあ、元々君達は鎮守府で働く子達だからな

一緒に頑張ろうな」

「やりました」

「おやつーごほうびー」

「やるきがみちあふれますー」

妖精さん達はやる気満々みたいだな。明日の朝10時に迎えが来

るからそろそろ支度をしなくてはな。釣竿とかも持っていても平気だろうか?…まあ大丈夫だろう。

しかし不安要素しかないな…どうしよう

「覚悟しとかないとなー」

準備をしながら少し疑問を感じた。

「…なあ妖精さん」

「「なんですかー?」」

なぜかいろいろ出発準備をしている妖精さんは振り向いてくれた。

というか君達同じ服何着もあるんだね。

「ドロップ艦ってどうやって連れ帰ってくるのかな?」

「たおしたてきからー」

「ひかってるなにかがでてきてー」

「それがかんむすになるー!」

「なるほどねー。けどそれが同じ艦娘だったらどうなるんだ?」

「そのちんじゅふにいるかんむすがつよくなるー」

つまり同じ子が2人いることはないわけだ。それはいいことを聞いた。

2人いたら名前とかどうすればいいかわからないもんね

「ありがとう、はいこれ君達が答えてくれたご褒美だ」

「こんぺいとうだー!」

「あなたについていきますー!どこまでもー!」

「おいしー!」

頬張りながらキラキラした状態で妖精さん達が食べていた。

「支度も終わったし、早めに寝よう」

そして私は布団に入りどんな子たちがいるのか不安と期待を胸に秘めて眠りについた。

やっぱり鎮守府は危機的状況です！

「大変お待たせいたしました谷口真様。車はこちらでご用意している  
のでお乗りください。」

ついに鎮守府に行く当日、杉田中将の部下である江口さんの車に  
乗って向かおうとしていた。

「こちらこそよろしくお願いします」

「たにぐちさんのかたにのれー」

「おー！」

妖精さん達が肩に乗ってきてそのまま荷物を渡して車に乗った。

「場所は横須賀鎮守府でしたよね？では向かいますよう。」

車の中で横須賀鎮守府はどのような所かの資料を見た。

どうやら昔使っていた所をそのまま使っているようなので埋め立  
て地になったせいで鎮守府自体は山の方にあるようだ。しかし、その  
鎮守府は基本艦娘達の寝床なので、提督などは基本家を売るところを  
急遽鎮守府にしたところにいるようだ。出撃など秘書官をする子達  
は基本鎮守府からのバスで来てそのバスに乗り遅れた場合はそんな  
に遠くないので徒歩のようだ。

「着きましたーこちらが横須賀鎮守府です！」

横須賀鎮守府についていたら誰かが門にの前にいた。女の子のよう  
だったが私はその子の顔を見て酷く怒りを感じた。

「はじめまして谷口真提督、私の名前は大淀と申します。以後お見知  
りおきを…」

「ああ、これからよろしく頼む。そしてすぐですまないがこの鎮守府  
を案内してくれないだろうか？あと今は12時だから午後18時に  
食堂に集合するように全員に伝えてくれはくれないか？」

「かしこまりました…」

顔が死んでいる…笑っているが目の瞳がひどく濁っている。

前任はいつたいどんなことをしたのだ？どうすればこんなことにな  
るのだ？資料を見ていたが具体的なことは書かれていなかったの  
で彼女の顔をみて少し考えてしまった。



「ではこれで私は失礼します！ご武運を！」

江口さんが敬礼してくれたので私も敬礼をした。

歩いているときに様々な艦娘を見たがみんなから睨まれてしまった。

おそらく私の顔は今穏やかではないだろう。前任への怒りでいっぱいであった。

「最後にこちらが提督が基本的に執務をこなす執務室です」

「ああ、ありがとう。荷物はもう部屋に置いたし早速仕事をしよう。

手伝ってくれないか？」

「かしこまりました。」

「そう硬くならないでくれないか？私は新任だ執務は確実に君の方が上だ。君には色々教えてもらいたいから出来ればもう少し柔らかくしてくれ」

「いえ、そういう訳にはいきません。私は兵器ですから」

「なに？」

その瞬間に執務室には凍るような冷たい空気になってきていた。

「はい、私…いや私達は兵器です。なぜなら私達には補給などが必要で、手から大砲を出せます。人間には出来ません。しかし私達は兵器だからこのようなことが可能です。」

「前任がそう言ったのか？」

「はい、そうです。」

それを聞いてイラつきを感じた。ここ最近は怒ってばっかで嫌になる。兵器などと聞いて一度やらかしているから少し冷静にならないと感じた。

「まず、先に言っておこう。私は君達を兵器だとは微塵も思っていない。」

「なぜでしょうか？」

「私の見解としては理由はいくつかある。」

1つ目、確かに君達には補給は必要だが食べるわけではない。工廠で艦装に補給するだけであって君達ではない。しかも普通に食事が出来るからな。

2つ目、君達は大砲などを出現させることができる。しかし、君達の手や口などからは放つことはできない。武器というのは君が言っていた大砲だ。君はその武器である大砲を出せる女の子だと私は思っている。

3つ目、ここまで来るのに様々な艦娘に見られたがひどく怒りや、悲しみなどを感じた。武器が怒るか？悲しむか？私はそう思わない。」

「では…じゃあ私達はなんなのですか？人間ではないのですよ？私達はなんだというんですか！」

彼女は急に声を大きくした。先程までの何かを恐れたりなどの抑えてた感情などが溢れたのだろう。私は優しく当たり前のように言った。

「艦娘だろうか？かつて日本のために身を賭して奮闘した艦隊の魂を宿した娘達だ」

それを聞いて大淀は啞然としていた。そしてその言葉を理解したかのように震えながら言った。

「私達は武器ではない、人間でもない、艦娘？では今まで私達が悩んでいた、苦しんでたことはなんだったの？」

泣きそうな彼女の頭をそつと撫でて私は謝った。

「すまない、それは前任が言い続けていたのだろうか？彼の代理…いや、同じ提督として深く謝罪しよう」

彼女は泣きだしてしまった。辛かったのだろう。悩んだのだろう。

私は前までただの軍の学生だ彼女の気持ちは計り知れないが理解することは出来た。彼女が落ち着くまでは彼女を撫で続けていた。

「見苦しいところをお見せしました」

「落ち着いたようで良かったよ。では早速お願いしてもいいかな？」

「グスつ…かしこまりました」

「私に仕事を教えてくれないか？実は本当に提督になりたてだから一応やり方は教わったが紙などどこにあるかなど分からないからな」

私は自分なりに出来るだけ笑顔で言ってみた。

「ふふ、分かりました。大淀型軽巡洋艦大淀執務をさせていただきますま

す！」

やっと彼女は笑ってくれた。私はそれをみて少し明るくなった。

「ああ…そうだ、前任が居なくなり私が来るまでの間執務や出撃管理をしてくれていたのは君なのか？」

「はい、やり方見ていたのでそのままやっていました」

「ありがとう、そして私が来るまでの間よく耐えてくれた」

「もうまた泣いちゃいますよ？けどありがとうございます。私前任に褒められたことないのでとても嬉しいです！」

彼女はまだ涙袋が腫れていたが顔は完全に笑顔を取り戻したようだ。

「では、始めようか」

「はい、提督が鎮守府に着任しました！これより艦隊の指揮をとります！」

こうして私の提督としての仕事が始まりを告げた。

天龍は新任提督に物申したいそうです！

「邪魔するぜー！」

大淀と資料や書類整理をしていた時にドアの前から誰かの声が聞こえた。時刻は16時全員が食堂に集合するまであと2時間となりいきなり来たので少し驚いてしまった。ドアが開いたらそこには天龍が堂々と入ってきた。

「天龍さん！ノックしてから入ってください！」

「んなことはいちいち気にすんなよ大淀！それよりもさ、あんたがここに着任した提督か？」

「ああ、そうだ。自己紹介はみんなの前でするから後でもいいか？」

「おう、それは別にいいぜー！」

「フランクなのは私としてはありがたいが流石にドアはノックして入って来てくれるかな？仮にこの場に私より階級が上の方達がいた場合君達の安全が保障できなくなってしまうからね」

「確かにそれは怖いな…わかったよ次からはちゃんとノックするよ。」

それよりもさーもし艦隊を作るなら俺を出撃させてくれよー！」

「天龍さん!?提督の前でその態度は無礼ですよ！」

「大丈夫だ大淀、無理に硬くされた方が困るからな、ある程度は自然のままでもいい」

「わかりました…」

「しかし唐突だな…天龍と言ったな、なぜ君は出撃したいのかな？」

「それがよ！俺は提督が鎮守府にいない間に大本営からの建造命令でここに来たばかりでな？まだ演習と遠征しかやったことないんだよ」

「そうゆうことか…しかし今は資材はあるが心もとないからな、すまないがもう少しだけ遠征を頼めないか？資材がもう少し貯まれば天龍、君を旗艦として出撃させよう」

「本当か!?提督あんた話せば分かる奴だな！わかったもう少しの間だけ我慢するよ！じゃあ俺は娯楽室に戻るぜー！」

「ああ、わかったよ」

「全く：天龍さんは…」

「大淀、ここの娯楽室には何があるんだ？」

「えっと、基本ソファと机しかありません。前任のせいでみんな口数も減ってしまい、とても暗い感じですよ：ですが天龍さんが来てからはだいぶみんなおしゃべりするようになりました」

「そうか何も無いのか：それは娯楽室ではないな、わかった今度テレビや色々な雑誌や漫画を持ってこよう」

「え、提督よろしいのですか？」

「？何を言う？娯楽室なのだから面白いものでも置かないと意味ないだろう。」

「ありがとうございます。これで少しみんなも明るくなると思います」

「そうか、では18時までに執務を終わらせよう。娯楽は明日家から取り寄せる」

「かしこまりました」

天龍が嵐のようにやって来て去って行ったがおそらくいい奴なのだろう、私はここに着任している艦娘達を確認しながら少し嬉しく思った。

そしてついに18時食堂で横須賀鎮守府にいる艦娘達が集まる食堂に向かうのであった。

艦娘達は新任提督を品定めしていたようです！

時刻18時。ついに食堂に横須賀鎮守府にいる艦娘達全員が集結した。

そして私は全員が座ったことを確認して自己紹介と私が考えていることを伝えた。

「私がこの横須賀鎮守府で提督をすることになった谷口真だ。」

前任の汚職を知った大本営がこの復興のために私をここに着任させた。先程大淀と話をしたがまず先に言わせてもらう。

私は君達を武器だとは一切思っていない！」

少しざわめきを感じた。それはそうだろう今まで武器だ、国の為に身を粉にして使われろと言われてたのだそれは動揺してしまう。

「質問よろしいでしょうか？」

「ん？君は確か神通だな？いいだろう質問してくれてかまわない」

「ありがとうございます。おそらく皆さんも見えて少し気になっていると思いますが大淀さんの目が赤くて涙袋が腫れているようですが：もしひどいことをしているようでしたら：」

「ああ、それに関してはこれから話すがこの話をしてしまったらこのような状態になってしまった：：今からちゃんと話そう」

そういつたら皆続きが気になるのかざわつきは消え静寂な空間ができていた。

「えー、では単刀直入に言おう君達は武器ではない！艦娘という日本を守るためにかつて奮闘してくれた軍艦の魂を宿した我々人類に歩み寄ってくれてる隣人だと私は思っている！私が思う武器というのは食事は出来ない、喜怒哀楽なんてもいはない！それなのにここはなんだ？食堂だ！君達は食えることが出来る！しかもさつきまで私に怒りを向けてた子達もいた！仮に私は武器だと言いたい者は手を上げろ！そして手を上げた者は武器として食事や発言などはなくしてあげよう！」

自分で言っていて職権の乱用だと思う。しかし私はここは強く出なくてはならないと感じた。そのおかげかはわからないが先ほどま

で虚ろな目をしてた子達も興味を持って来ているのがわかった。

「私達は武器ではないのですか？」

電が震えた手を挙げながら聞いてきてくれた。そして私は彼女の頭をそつと撫でながら優しく言えるように心がけて伝えた。

「そうだ、君達は武器ではないよ。理解できてないならゆつくりでかまわない。けどこれだけはわすれるな…？君達は艦娘なんだ」  
電は泣いてしまった。そこでみんながなぜ大淀の目が赤くなったいたのか理解したおそらく今の言葉を聞いて嬉しくなったのだろう。そのおかげかさつきから大淀は笑顔である。私は電が落ち着いたところを見計らってみんなの前に戻って伝えなければいけないことを伝えた。

「君達を私は武器だと思っていない、たからこそ謝罪をさせてくれ。前任の今までの汚職を確認できていなくて本当に申し訳なかった」

ここで艦娘達は驚いてしまった。少なくとも悪い人ではないと思いは始めていた矢先謝ってきたのだ。しかも体勢は土下座をしようとしていた。その様子を見て隣にいた大淀はとつさに

「提督！おやめください！」

しかし私はここでやめれなかった。なので言葉をつなげた。

「私はここに覚悟してきた。おそらく君達はわたし…いや人間を信頼することを恐れているとだからこそここで謝罪させてもらう！」

前任はたしかに悪人だ、だが全ての人間が悪人というわけではない。君達が非道に扱われていたことを知らせてくれたのもまた人間だ。善人もいる。そこだけを理解してもらいたい。この場でまだ許せないと思っている者がいるならどうすればまた人間を許してくれるか言ってくれ！私は自分の腹をきる覚悟でここにいる！」

そして土下座をした。

当たり前だと思う。彼女達からの信頼がなければ深海せいかんと戦ってくれる者達もいなくなるし、何より彼女達の絶望している顔を見たくはなかった。そんな彼女達がまた人類を信頼してくれるならば、私の命など安い。

「提督、顔を上げてくれ」

那智がそう告げた。那智はこの鎮守府での重巡洋艦の中では古株だったようで他のみんなもその発言に対して頷いていた。

「あなたは少し勘違いをしている。そもそも私達は人間は嫌いではない。たしかに前任は許せないが…私達が軍艦だった頃記憶はあまりないが人間達がちゃんと私達を使ってくれていたことは理解できているつもりだ。だからあなたがそうやって謝る必要はない」

そう言ってくれたので私は顔を上げて那智を見た。

「あなたはよい人だな。今の行動でわかる…おそらく案内されている時の皆の視線でそう思ったのだな。申し訳ないがあなたを信じて大丈夫か品定めをしていた。あなたの目は真っ直ぐで嫌悪感など一切感じなかった。私はあなたにつかえよう。武器としてはなく…艦娘として…あなたの部下として」

そういつた瞬間全員からの拍手を受けた。死を覚悟していたのもう少しで腰をつきそうになってしまった。

「ありがとう。ではいきなりで申し訳ないがここで今後の方針を決めさせてもらう」

「あ、提督その前に少し問題が…」

「どうした明石？何かまずいことが？」

そういつて明石が罰の悪そうに手を挙げたあと頬をポリポリしながら行つた」

「前任の扱いのせいで妖精があまりいないんです。そのせいで私達も今まで十分に補給が出来ませんでした…」

まさかの妖精さんが少なかった、おそらく前任に嫌気がさしたのだろう。私も仮に妖精だったら迷わず前任を見捨てていただろう。

「私達を心配して残ってくれた子達もいるのですが…それだけでは足らず…」

この妖精問題を考えてる時に突如食堂のドアが開かれた。

「そのしんぱいはごむようー！」

「いいこたちたくさんあつめたー！」

「じんいんぼしゆう…まかせろー！」

そういえば肩にいないと思つていたいつもの妖精さん達がドヤ顔



いししちちがしつきた。

妖精さんたちが新任提督のために奮闘したいみたいです！

ずらー！ずらー！つとそこには数百人の妖精さん達が集まっていた。

「たにぐちさんのために！」

「よこすかちゃんじゅふのちかくにいたなかまたちを！」

「たくさんよびました！」

??こんにちはー！／／

「この人数なら妖精さん達だけでローテーションが組めますね！」

明石が嬉しそうに言った後に私は妖精達をどうするか考えていた。

「そうだな…それならこれはどうだろうか？私と共に来た3人は一人が艦娘達の寮である旧鎮守府の食堂と掃除の班長を、もう一人は横須賀鎮守府の食堂と掃除で…最後の一人は横須賀鎮守府の工場で班長をお願いするというのは？」

「いぎなしです！」

「けどねどこはたにぐちさんとがいいです！」

「わたしたちが…はんちよう…！」

どうやら気に入ってもらえたようだ。すると他の妖精達はどうしようか？お菓子などもみんなの為に買わなければならないと考えるとすごいことになりそうだな。

「では他の妖精達は彼女達3人と話し合って三つのグループに分かれてくれないか？君達への報酬はそうだな…おやつは金平糖で各班長から褒められたりした場合小さいシュークリームを1つ配布しよう」その話をした瞬間、妖精達はキラキラしながらよだれを垂らしていた。

「すごいキラキラですな…！」

「おそらく嬉しいのだろう…しかしこれで妖精不足も解消したな。

ではこれからの方針を今から君達に伝える」

少しずつみんなが妖精達を見ながら和やかに談笑をしていたがそ

の言葉を聞いて全員が私をじつと見つめてきた。

しかし最初の目線とは違い気合いや明るい眼差しで見られる子達が増えているのが理解できた。

「ではまず第一艦隊からメンバーを言う！呼ばれたメンバーは最後に全員で声を上げてくれ！」

第一艦隊！那智を旗艦とし金剛、榛名、赤城、初春、神通だ！」

「「「「はい!!?」」」」

「このメンバーは主に海域突破だ！そのため一番過酷で大変だよってくれるか?」

「もちろんネー提督ー！ワタシがいれば余裕ヨー！期待してネー！」

「期待している、では次に第二艦隊！」

旗艦は扶桑として、山城、加賀、川内、島風、潮！」

「「「「はい!!?」」」」

「このメンバーは主に北方海域の方へ出撃してもらう！そのため軽空母と駆逐型メンバーを少し増やして臨機応変にする！メンバーは龍驤、隼鷹、陽炎、浜風、親潮、霞、白露、夕立だ！」

「「「「はい!!? (つばい!)」」」」

「次は一气に行くぞー第三、四、五艦隊は主に遠征に行ってもらおう！」

第三艦隊は旗艦を天龍とし、響、電、雷だ！」

第四艦隊は旗艦を矢矧で、不知火、霰、荒潮だ！」

第五艦隊は旗艦を那珂として、白雪、初雪、叢雲とする！」

「はー！」

「第三艦隊は主に燃料の遠征に出てもらおう！」

第四艦隊は弾薬：第五艦隊はボーキサイトなどだ！鋼材は燃料と弾薬と同時進行してもらおう！」

「はい提督！質問でち！」

「ん？伊58かどうした？」

「ゴーヤでいいでち！私達潜水艦はどうするべきでちか？」

「ああ、潜水艦達は前任にオリョクルに行かされ続けていたのだろうか？だからしばらくの間は休みと取ってもらおうつもりだ！」

「本当でちか！たくさんお昼寝できるでち！」

「たくさん…本読める…」

「たまにはプールとかに入りたいわね、しばらくは馬堀にでも行こうかしら?」

「有意義に使ってくれて構わない。そして他の子達は今回の指示はとりあえず最初はこの体勢で行くということでちゃんと大淀と話し合い皆平等に休みを取れるようにローテーションを組むつもりだ!そして君達は外の世界をあまり知らないだろう?なので休みの日にはどこに行くか教えてくれれば基本外出許可を許すつもりだ!」

「了解しました!」

「その体制の中で新しく来た艦娘達とまだ練度に心許ない子達は第六艦隊、第七艦隊で演習などをして高めてもらう!そして最後の第八艦隊では突破した海域にまだ潜んでいる深海棲艦の撃退をお願いしたい!このメンバーはまだ具体的には決めていないので油断しないでくれ!では今回はこれにて解散だ!」

全員がぞろぞろと食堂から出て行く時にある三人を私は呼んだ。

「すまない、鳳翔と間宮と伊良湖の三人は少し残ってくれ」

そして食堂には私と大淀と残ってもらった三人で今後の食事についての話し合いを始めた。

「私としては横須賀鎮守府に間宮、旧鎮守府に伊良湖、そして鳳翔を旧鎮守府の中に建設を予定中の居酒屋的なものをやってもらいたい。

もちろん他の艦娘達と妖精さんに協力してもらいながらだが…ここで皆のリーダーとして出てもらいたい。頼めないだろうか?」

「分かりました。ですが提督が命令すれば基本私達は従いますがなぜ命令にしないのですか?」

頭の上に?マークをつけた間宮が質問をしてきた。

「うむ、それに関しては私なりの考え方だがまだ命令することを命令した奴自身がある程度理解してないとイラつきを感じないだろうか?少なくとも私は私自身がそのように命令を下されればモチベーションは下がるし、その命令に従っただけだと達成感をあまり感じないだろうか?まあ、結局は私自身が嫌なことは極力君達にはしたくないんだ」

「なるほどそういうことでしたか。提督はとても優しい方ですね！」

伊良湖は嬉しそうに言ってくれた。

「前任がそうしなかつただけで私は行なっていることはごく普通なことだと思いますが……」

「そんなことはありません……考えていてもそれを実行するには勇气が必要です。あなたはそれが出来る……これは自信を持ってすごいことだといえます」

「鳳翔……ありがとう、そういうことなら素直に受け取ろう」

そうやってメニューなどについて話し合つて今日はいつもより遅めに21時に全員でカレーを食べた。途中からは落ち着いてきたらやるといっていたのにどんちゃん騒ぎが始まってしまっていて、みんな帰りは疲れ果てた状態で旧鎮守府に帰っていった。

私はみんなが戻った後に一人で執務室で考えていた。艦娘達についてはあまり問題はないようだ。しかし次の問題はこの横須賀に住んでる人達にどうやって伝えるべきかが悩みの種だ。

「まあ、とりあえずはこの鎮守府の復興だな……今後の方針や秘書艦のローテーションなども考えなくてはな……」

そうだ私にはやらなければいけないことがまだまだたくさんあるのだった。

第六駆逐隊が執務室に突入するようです！

「暁型駆逐艦一番艦暁よ！」

「よろしく頼む、私がこの提督をしている者だ」

艦娘達が食堂に全員集まってから5日がたった。最初はここ最近の出撃などの資料を細かく見ながら新米提督なので初めての編成と出撃をしてもらい遠征などもして2日前に初めての建造を3人分行った。

それぞれのレシピで駆逐艦と戦艦と軽巡にして日数的には成功のようだった。

そこで2日で建造出来る駆逐艦に工廠で会おうとしていた。

この鎮守府に暁以外の第六駆逐隊があるので後でみんなに伝えてびっくりさせてやろう。

「私以外の姉妹艦はいるのかしら？」

「ああ、3人ともいるぞ。すまないが神通一通り鎮守府を案内してくれないだろうか？私は用事があるからここで失礼する」

「かしこまりました。では暁ちゃんついてきてくださいね」

「ええ、お願いするわ！」

今日の秘書艦は神通だ。神通と暁もいなくなったしとりあえず工廠の妖精さんを集めた。

「はい、これ建造ご褒美のマシユマロな。頑張ってくれてありがとう」

「やったー！」

「このためにいきてるようなものです！」

「じょうじょうね」キラキラ

どうやらみんな喜んでくれたようだ。それにしてもここ最近は疲れたな…初めてここに来た時に少し緊張してしまい口調が硬くなっってしまった。柔らかく接したいのだがいまいち出来ない…どうしたものか

「なあ、どうしたらもつとフランクに話せると思う？私としてはもう少しみんなと仲良くしたいのだが」

「ごらくしつにいつてみんなとゲームするのはどうです?」

「! それはいい考えだ! さつそく後で行ってみよう、ついでに響達に暁が着任した事を知らせに行こう」

工場を離れて私は娯楽室に向かった。5日前に比べて家から色々な物を持ってきたおかげかみんなワイワイとしていたり一人の時間を楽しんでいる子達もいた。

「いたいた。響、雷、電、今空いてるか?」

「やあ、司令官:3人ともいるよ」

「3人でダウトしてたのです!」

「響は嘘か本当かわからないけど、電なら顔に出やすいから全然負けないわ! 司令官もやらない?」

「どうやら3人でトランプで遊んでいたようだ。」

「後で一緒にやらせてもらおうかな。しかし3人では少し面白みにかけないか?」

「本当×約束だからね!」

「つまらなくはないのです。けど電はすぐに嘘だとバレちゃうので早く終わってしまうのです」

「そうなのか、しかしこれから4人でやれるな」

「司令官:それはまさか:」

「暁が建造されたのね!?!」

「4人ならウノとかできるので!」

みんな喜んでもらえて何よりだな。そろそろ案内も終わったことだろう:執務室に向かわなければ

「では私はこれから執務室で暁と少し話す。終わったら娯楽室に行つてくれと伝えるからもう少し待っててもらいたい」

「了解(なのです)!」

娯楽室を出て執務室に向かっていたら大淀が迎えに来てくれたよう途中で出会った。

「提督! 見つけました。暁ちゃんと神通さんが執務室にもういます」

「そうか、伝えに来てくれてありがとう。今日の書類はどうなっている?」

「今日提出しなければいけないものは終わりました。基本最優先しなければいけないのも終わっているので特に問題ありません。提督は執務が早いのでとても助かります」

「謙遜しなくていい。最初なのだから書類が少ないのは当たり前だ。だからこそもっと速くならなければならぬとな」

そのような内容を話しながら執務室についたので中に入ってみた。「すまない2人ともまたせたな」

「神通さんはすごいわね！色々な動きがすごいレディーで！私もいつかそうなりたいわ！」

「ふふ、ありがとう暁ちゃん。あ、提督すみません紅茶をいただいてます」

「気にしなくていいぞ。しかし2人とももう仲良くなったのか」

中では神通が色々と暁の質問に答えていたようだ。その質問内容は知らないが暁が神通を尊敬な眼差しで見ているのはよくわかった。

「では暁。君にこれからの方針を伝えさせてもらう。今日はもう休んでもらうつもりだが明日からは早速演習に出てもらいたい。

練度が改に改造できるようななら響達と遠征に出てもらう。その中でさらに練度が上がれば出撃してもらおうつもりだ。

「ここの鎮守府というか私の方針としては皆の練度は同じぐらいにしたいからな。期待しているぞー」

「了解したわ！司令官！」

そして少し4人で談笑していたらドアが突然に開かれた。

「二うわあー！ー！二」

そこには響と雷と電が雪崩れたように入ってきた。

「お前達…盗み聞きしていたのか？それはさすがに見過ぎないのだが」

「ごめんなさい司令官！気になって仕方なくて！」

「反省しているなら何も言わない。次からは気をつけるように」

その光景を見て周りにいた子達は驚いていた。

「その提督…もっと叱らないのですか？さすがに優しすぎると思いますが…」



「そうか？反省している子達に怒ってもただの私だけの自己満だ。反省してるならそこで終わりだ。しかしまた同じことを繰り返せば私は優しくないぞ？」

少し周りを睨んで言った。それを見た子達は心の中でみんなに伝えて怒られないようにしなければいけないと思った。

「私としての1番はどこが悪かったのか、どうするべきだったのか：ちゃんと伝えて次からはどう気をつけるべきかを教えてくれれば特に怒らん。まあ、そのどう気をつけるべきかのところはもうそうならないようなら説明をちゃんとしてもらい、それを約束してもらえればいい…」

3人とももうやらないな？」

「「分かりました：」」

「さて説教は終わりだ。暁ちようどいいから3人と一緒に行きなさい。伝えたいことはとりあえず伝えたからもう休みでいいぞ」

「司令官：私達と約束した：」

「一緒に遊ぶのです！」

「：わかった。では神通と大淀も来てくれ。7人でウノをやろう」

「「やった！（のです！）」」

「ハラシヨ」

「「わかりました」」

こうして7人で娯楽室に向かいみんなでウノをした。ちなみに一番強かったのは神通であった。

新任提督はお酒を酌み交わすようです！

「なあ提督？今晚一緒に飲まないか？」

「そうだな。那智は明日休みなのか？流石に休みじゃないなら行かないが…」

「もちろん、それぐらいは考えている。あなたと飲んで色々話したいのだ」

「わかった。それならさっさと執務を終わらせてしまおう」

今日の秘書艦是那智だ。今日は執務を早く終わらせて私はやらなければいけないことをやろうしていた。

「那智、私はこれから上司である杉田中将に電話をするから少しの間外に出る」

「了解した」

執務室を出て外に出た。携帯を取り出し中将に電話を掛けた。

「もしもし私だ」

「お久しぶりです中将殿。鎮守府の今の状況を説明する為に電話をさせていただきました」

「何気にするな。それよりも鎮守府内での艦娘達の様子などはどうだ？」

「はい、私達が考えていたよりも彼女達は寛大で前任がおかしかったことを理解していて今は私の指揮の下執務などは進んでいます」

「そうか…それは嬉しい話だな。おそらくこれは君でないと出来なかつただろう。とてもいい情報だ。艦娘達の練度はどうだ？」

「はい、無理やりの出撃などさせられてたせいだと思いますが元々練度は高いようで最初の練度上げはそこまで多くはやらないようにしています」

「なるほど。まずはなるべく休ませないとな…」

すまんが来週あたりに私の艦隊を横須賀鎮守府に合同演習として連れて行ってもかまわないか？」

「問題ありませんが…その演習の意味が理解しかねます。できれば理由を説明してもらいたいのですが」

「彼女達が君に会いたいと言ってたのが主な理由なのだが…

そうだな一応君の鎮守府にいる子達の質を測らせてもらうとかでいいか」

「そういうことでしたか…分かりました。中將が連れてくるのですか？」

「いや、私の部下が連れて行く」

「ということは江口さんですか？」

「……寺内だ…」

「え、彼女が連れてくるんですか？まあ仕方ありません。了解しました」

「では電話を切るぞ、私も休みが欲しいからな」

「はい、失礼します」

電話を終えて執務室に戻ろうと私は歩きだした。

大本営にいる第一艦隊…練度が高く一人一人が連合艦隊の旗艦を務めることが出来る奴らだ。これは少し工夫をしないと勝てそうにないな。

戦術を色々と考えながら執務室に入った。

「もう戻って来たのか。どうした？少し怖い顔をしているが…」

「来週大本営の第一艦隊と合同演習をすることになった。あの艦隊は一人一人が強敵だからどう不意を突くか考えていてな」

「何!?それは本当か☒ぜひ私も参加したいのだが」

「ああもちろん。那智には旗艦をしてもらおうつもりだ。明日あたりに潜水艦の子達にお願いしなければな…」

演習も来週に向けて特別メニューでやらしてもらおうつもりだ。それぐらいのハンデをもらえないと彼女達には勝てん」

「了解した！どんな相手か楽しみだな！」

残りの執務を終えて晩飯を食べてついに那智と居酒屋へ向かうことになった。

初めて旧鎮守府内に入ったがとても綺麗になっていたので内心驚いていた。

「ああ、あなたが着任してから妖精さん達が私達の家具や服を新品な

どに変えながら掃除をしていたからな」

「……よく私が考えたことがわかったな」

「顔にそう書いてあったぞ？」

次からそういうことは気をつけないといけなと感じた。だって  
恥ずかしいし。

「ではさっさと向かおう」

私はすぐに話を逸らし鳳翔が営業しているところに向かった。

「いらつしやいませ。あら提督と那智さんいらしてくれましたか？

ありがとうございます」

「お酒は何があるか教えてくれないか？」

「こちらにあるものが全てです。好きなものをどうぞ」

鳳翔の後ろには綺麗に並んだ様々な日本酒やワインなどが置いて  
あった。そこを眺めている時に一本の日本酒が見えた。

「今日はこれにさせてもらおうかな」

「かしこまりました。作（ごく）ですね」

「ああ、後つまみで明太子を頼む」

「この日本酒は何なのだ？」

「これは三重県で作られているものでな。明太子などと合わせて飲む  
ととても美味しいんだ」

「はい、明太子になります」

那智が作を飲んでみて驚いたような顔をしていた。

「まるで水の様な透明さだな。アルコールが心地良く鼻にとおる…」

そしてその後少し辛さがくるな。明太子と合わせるとたしかに  
うまいー！」

かなり満足してくれた様子だった。

「では夜は始まったばかりだ。今から色々語ろうじゃないか」

三人のおしゃべりは午前0時をまわり解散となった。帰り際の那  
智は少し嬉しそうに、そして何かを決意したような顔をしていたよう  
に見えた。

艦娘達は新任提督に勝利を捧げたいそうです！

演習の仕方を変更してから演習を続けてついに合同演習前日となった。明日のメンバーを知らせるためにまた艦娘達全員を食堂に集めた。

「皆聞いてくれ！明日来る艦娘達は大本営の第一艦隊だ！一筋縄ではいかないだろう…しかし勝てない相手ではない！呼ばれた者は返事をしてくれ！」

「まず旗艦是那智！」

「了解した！あなたに勝利をあげよう！」

「二人目は赤城！大本営の艦娘達の艦載機達は強い！だが落とすといふより攪乱に近い動きをしてくれ！」

「分かりました。慢心はしません！」

「三、四人目は摩耶と天龍！二人は赤城が攪乱している艦載機をありったけ撃ち落とし自分達に砲撃がくるように戦ってくれ！お前達なら避けれるよな？」

「やってやんよ！相手は強いのかなんか知らねーがやるからには勝つてやる！」

「提督！合同演習で勝つたら出撃させてくれよ！」

「もちろんそのつもりだ。五、六人目は伊8と伊168だ！相手が上に注意を引いてる間に魚雷でダメージを与えてくれ！」

「魚雷…了解…」

「オツケー！まかせてー！」

「戦術的勝利でも勝ちも勝ちだ！この戦いで経験を積んでくれ！もちろん出ない子達も興味があるなら見に来てくれてかまわない！指揮は私がとる！」

「了解！？？」

「ではこれから戦術を指示する！まずはじめに……」

作戦をみんなに伝えて解散した後、自室で電話をした。

「はい、寺内です」

「谷口だ…久しぶりだな」

「先輩ですか☒久しぶりですねー！先輩に会えなくてとつても寂しかったんですよー！」

「そうかそうか、明日何時に来るか教えてもらってもいいか？演習が終わった後でなら約束していた飯を奢ろう」

「明日は14時に着く予定つす！楽しみにしてますねー！帰りは先輩の部屋かな〜」

「安心しろ、酔ってる場合は大本営の中将のもとへ送ってあげよう」

「え、それは勘弁ですね…まーいい所を期待してますー！では」

電話を終え、シャワーを浴びてゆつくり風呂に入り少し考えた。

今回の演習なぜ勝ちたいかという大本営の第一艦隊を驚かせようと思っているからだ。私は彼女達とは仲が良かったので一緒にいたが彼女達にはある欠点がある。

それは普段は優しく接してくれるのだから戦闘になると心がなくなったように基本通り戦うくせがある。彼女達はマニュアル通りなら素晴らしい指揮をとれるが驚くほどのアドリブがおきるとあたふたしてしまう弱点がある。今回はそこを狙うつもりだ。

「明日は大変な1日になりそうだ」

帰ってきた妖精達と話しながら私の夜はふけていった。

大本營の第一艦隊は新任提督を気に入っているようです！

ああ…やつと会える…

「あの…大和さん？どうかしましたか？」

「…え？なんでもないわ秋月ちゃん」

「本当ですか？すごいニヤニヤしてましたけど…」

「おおかた谷口さんに会えるのが嬉しくて顔に出てんだんじゃないの？」

「ず、瑞鶴！その言い方だと変態さんみたいに聞こえますよー！」  
「けど翔鶴ねえー。そこにいる第一艦隊の旗艦さんは開いた口が塞がらないみたいよ？」

「これは完全に凶星ね…」

「けど確かにたのしみね！また真兄に会えるの！」

「うっかりしてたわ…そうね望月早く彼に会いたいわね」

「私達をあんな風に指揮できる人なんて今の海軍でなかないんじゃない？」

「そうね大井さん。彼ほど我々を扱う人は海軍の中でほんとにわずかに…普通の提督だと私達の方が指揮するのはうまいですからね」

「扱うとか言ってしまうとまた谷口さんが怒りますよ？いくら我々のことを大切にしているからってあそこまで怒られると泣きそうになりますからね」

「みんなー先輩に会うのは確かに楽しみだけどもうすぐで着くから気を引き締めてねー」

「」「」「了解！」「」「」

今日は私達が待ちに待った日。彼に会うため…

…いえ今復興中である横須賀鎮守府への視察と艦娘達の能力の測定が今回の目的である。

私大和が指揮をとる大本營の第一艦隊は少しの間だけ彼に指揮をとってもらったことがありその能力の高さからみんな彼のことをと

ても気に入っていた。

ついに横須賀鎮守府に着き久しぶりに彼の顔が見えて心の底から嬉しくなってしまった。

「みんな久しぶりだね。大和さんも大和さんの講義を受けてい……」

「大和とお呼び下さい谷口さん？私はその方が嬉しいです！」

だめだ嬉しすぎてつい抱きついてしまった。心地よすぎる…相変わらずいい匂いがする…おそらく今の私の顔は真っ赤だけど落ち着いた顔をしているのにちがいない…

堪能してたら瑞鶴が私を彼から離れた。

「ちよつと大和☒いきなり何してんの？」

「びつくりした…助かったよ瑞鶴」

「気にしないで谷口さん。」

大和は後でみんなからの説教ね」

「ごめんなさい…会えたことがつい嬉しくて…」

次からは気をつけないと恐らくないと思うけど彼に嫌われたら私は戦場で生き残れる自信がない。

「とりあえずまずは鎮守府内を案内するから那智について行ってくれないか？私は寺内と少し話があるから後で合流しよう」

「なんすか☒まさかの告白ですか☒先輩からのなら受けるしかないっすよー」

「そんな訳ないだろう…この後の演習のこととか鎮守府の今の状況を伝えるためだよ」

「なんだちがうのかー。まあわかりました！しばらく二人きりっすね！」

なんと羨ましい！谷口さんと二人きりなんて私の周りを見渡したらみんな寺内さんを睨みつけていた。みんなおんなじ気持ちなんだなあ…

「まあ、そうなるな…ではとりあえず解散」

二人が執務室の方へ向かったところを見送ったら案内をしてくれる那智さんがみんなに質問をしてきた。

「皆さんは彼のことが好きなのか？」



「はい！大好きです！」

「大和はさっきの態度でわかるわよ。たしかに私達は彼のことが好きよ。まあ、私にとって彼は気軽に話せる友人って感じかしら」

「私も瑞鶴と同じですね。最初は緊張しているのかとても堅いのですが話せばどんどん口調も柔らかくなっているのかとても心を開いてくれることがわかった時にすごい仲良くなりたいたいなと思いました」

「真兄は私が一人の時とかに話しかけてくれたり色々な物語の話を読んで私を前向きな子するように頑張ってくれた」

「私は望月が明るくなつていくところを見て感謝を伝えるために話しかけたのがきっかけでした」

「私は彼の指揮の高さに惹かれたわ。あと別の鎮守府にいる北上さんと合わせてくれたからかしら」

「そうなのか…まだ我々に話しかけてくるときは堅いからなどうしたものか…」

「焦る必要はありませんよ。沢山おしゃべりをすれば自然と柔らかくなりますよ」

「そうか。では気長に待つとしようか」

「横須賀鎮守府にいる子達は彼のことをどう思っているのですか？」

「我々にとつてあの人は助けてくれた恩人だ。そして我々を指揮してくれる提督だ。といつても彼は我々に指揮をとつたことはないがな…」

「それについては心配ないわよ」

「ん？どうゆうことだ瑞鶴さん？」

「瑞鶴でいいわよ。谷口さんの指揮能力は圧倒的に高いの。だから敵がもつと強くなれば彼も指揮をとるわよ。あと今はまだあなた達を成長させるためじゃないかしら？あの人は常に私達艦娘を大切に想ってくれているから」

「知らなかった。彼の指揮わそんなにすごいのか…たしかに我々を想っていることは理解できる。あの人は顔や動きにすぐに出るからな」  
「ええほんとに分かりやすいです。けどそこがまた可愛くて好きです」

では今から鎮守府内を案内するからついてきてくれ。最後を娯楽室にして私が提督を呼びに行くまではそこに待機してもらおう」

「「「「わかりました」」」」

案内してるときは谷口さんの話でとても盛り上がった。そしてまだ少しだけだけど彼のことが気になっていいる子が増えている。これはなんとかしないといけないと感じた。

案内が終わり娯楽室で彼がくるのを待った。

「すごい、いろんな物が置いてある」

「翔鶴ねえ！みてみてテレビ置いてあるよ！大本営にもないのに」

「そうね瑞鶴。ここに住んでる子達が羨ましいわ」

すぐに娯楽室のドアが開き彼が入ってきた。

「待たせてすまないな。では今から演習をするために演習場に向かう。この演習で君達の弱点を君達に教え我々が勝つつもりだ」

「それは負けたくありませんね。楽しみにします」

こうして私達は演習場に向かい始めた。

艦娘達は彼の指揮に驚きを隠せないようです！

「そう落ち込むなよお前ら…誰にだって負けることはあるんだから。」

本番で負けなければいいだろう？」

「先輩酷いっすねー。この子達は先輩にいいところ見せて褒めてもらいたかったんですよ」

「こいつらはよくやったと思うんだかな…」

「私達が負けるなんて…」

「また落ち込んだじゃった。先輩が見てるんだから早く元気になってよ大和ー…」

そう今回負けたのは私達大本営のほう…しかもあまり抵抗出来ずに終始驚いた状態でいた。

「第一艦隊になって初めてよ！私と翔鶴ねえと一緒に制空権取られたの！」

「そうね瑞鶴…しかし私達は忘れてたわね…私達の艦載機は烈風だけど彼が扱った…いえ教えた艦載機の妖精たちにはそういう性能の差は関係ないことを」

大本営の第一艦隊は視察として他の鎮守府に行き提督と艦娘達の強さを見るのだから…負けたのは初めてだ…というかあんな戦略見たことない。あれは完全に艦娘に対しての戦い方だった。

「しかし私もあんな戦い方見たことないっす！やっぱ先輩は鬼畜っすねー！」

「なんでだよ…まあ合同演習をやるって言われた日から勝つために練習内容を変えたからな。みんなよくついてきたよ」

「あんな練習したことなかったから大変だったな」

「ほんとそうだよ！まああの練習なければ絶対負けてたけどな！」

だめだまだ立ち治れない…衝撃が強すぎる！あんなの驚くしかないじゃない！

私は心の中で悔しさが募っていた。演習中なんかは少し横須賀鎮守府達に恐怖を感じてしまった。



きるのは谷口さん以外いないのだ。

さらに彼は学校にいた頃に独学で艦載機やその艦載機の戦略など調べていた。おそらく演習が始まる前まで妖精さん達に指導していたのだ。並みの提督ならジェスチャーなどでしか伝わらないから諦めがちだが話して教えられる彼ならそれが容易にできる。

「このままじゃ制空権がとられて…きゃあ！」

「照月！大丈夫…☒つうぐ！」

「二人共！そんな…格納庫が一撃で…！」

いきなり砲撃がなつたと思つたら秋月と照月が被弾していた。しかも格納庫だ。格納庫に直撃するといつきに大破判定まで持つてかれてしまう。その状態を逃さずに相手は艦載機で攻撃を開始してきた。

「索敵にて敵艦隊みゆ！前方は…2人だけです！」

大井がそう伝えてきて驚いた！前にはなんと赤城と那智しかいないのだ。

「つく！全砲門！打て！」

私は砲門を赤城さんに向けて放つた。そしたら那智さんが赤城さんの前に出て打つてきた。そして私の弾は全て落とされてしまった。

「嘘…私の46センチ砲が…」

しかもあれは12センチ！いったいどうやって☒

頭の中がこんがらがってしまった。私の砲撃を那智さんは本来駆逐艦達が身につける単装砲を使い全て撃ち落とされたのだ。

「索敵！右舷にも敵が！相手は天龍単体です！しかも左舷には摩耶がいます！」

「さつき二人が大破になったのは二人のせいか！」

「他のみんなは大丈夫ですか☒」

「ええ、中破よりの小破ね…このままじゃジリ貧になるわよ」

そういつていたら大井さんがいつのまにか投げていた魚雷が那智さんに当たった。様子からみて中破だろう。

「この前巻き返します！全砲も…きゃあ！」

全員に爆発が起こりみんなが焦り出してしまった。そしてほぼ全

員が大破よりの中破まで食らってしまった。

「そうか潜水艦……だから最初に雷撃が出来る秋月と照月を狙ったのね」

そのまま少しずつ押され続け私達はD判定で敗北してしまった。

「なんですかあの戦略は！あんなの勝てるわけないじゃないですか！」

私は思い出したら泣きそうになりながら文句を谷口さんに行った。

「当たり前だ。君達に驚いて欲しくて真面目に考えたからな。この感じだと大成功のようだな」

「私達も驚きですよ……敵にもし提督のような指揮を出来る人がいたらと思うとゾツとします」

「どうやら横須賀鎮守府の子達も驚いているようです。それもそうだ。」

私達は戦略を考えたことがないわけではないはずだ。それなのに彼は我々の考えをあざ笑うかのような戦略だ。おそらく彼女達も少し悔しいのだろう。何人か納得してない顔をしている子達がいる。

「まあ、そう苛つくな大和……今度ご飯おごってやるから」

「デートですか☒わかりました機嫌を直します！」

心の中でガッツポーズをしてしまった。彼とデートだ！何着て行くこっかな！

「提督！そのような発言はあまりしないでください」

「なぜだ？頑張った子を労うの当然だろう？」

「そうではなく……もういいです……」

心中をお察しします大淀さん。私もあなたの立場なら同じことを言うでしょうから。

「まあ先輩？その前に私とご飯つすよね？」

「そうだったな、大淀私はこの後寺内くんと食べに行くから後はよろしく頼む。君達は泊まっていくのか？」

「はい、今回は宿泊して調査するという事で明日の夕方までは……っ  
え？二人はご飯に行くのですか？」

「ああ、前から約束をしていてな。寺内くんは寝床はどうするんだ？」

「そうですね、先輩の家で飲んでそのまま泊まります！」

「わかった。ではそうゆうことで失礼する」

「待ってください！谷口さん☒それは寺内さんとずっと一緒にいると  
いうことですか？」

「まあ、そうなるな」

何それずるい！しかも寺内さんすごいニヤニヤしてるし！ご飯は  
良しとしても谷口さんの家とか羨ましますすぎる！なんとか阻止しなけ  
れば！

「それなら私を呼んでいただけたら寺内さんを迎えにいきます。女性  
を男性の家に泊まらせるのはさすがに…」

「そうか確かにそれは軽率だったな。すまんが大和お願いできるか  
？」

「つえ？先輩？私なら気にしないっすよ？」

「よく考えれば君は綺麗なんだからもっと気にした方がいいぞ？世間  
のこととか。では大和そのときは彼女の介抱を頼む」

「了解しました♪」

「そんな先輩綺麗だなんてー！けどそんなこと気にしなくていいっす  
よ？ほんとに大丈夫ですよ？」

「まあ、今日はとりあえず解散だ！みんな今日は疲れたろう？明日の  
集合は遅めに10時でいい！疲れを癒してくれ！では解散！」

こうして合同演習は終わり実はこの後谷口さんに呼ばれ後何かい  
いことが起きないかなと思っっている私なのであった。

お酒は二十歳になってからです！

「あ…おいしいっすね〜このお酒」

「そうだろ？これは霧島というやつだ」

横須賀のとある居酒屋で今日の疲れを癒すために私と寺内の二人で飲んでいた。

「お酒もいいっすけど、私的には食べ物良かったっすね〜」

「まあそういうな、それよりこれ食べてみる。この酒にあうぞ？」

そうやって様々な話をしながら食べていたらつい寺内が潰れた。

「せんぱーいー？どーしてしよんなに飲めるんのー？」

「お前は早く飲みすぎだ。もっとゆっくり飲みなさい

酒の匂いを感じてだな…」

「スपीーーーー…」

「はあ、大和に連絡するか…」

先程大和には自分の連絡先を教えたので寺内を迎えに来てもらうために電話をした。

「お、はやいな…。谷口だ。寺内が酔ったから迎えに来てくれないか？車は門の前に置いてある。ラーメン屋の前についたら教えてくれ」

大和が来るまではどうしようか、一人だと流石に暇だな。

まあ、今後の方針でも考えるか…

「おまたせしました、谷口さん」

「ああ、わざわざ呼んでしまいすまないな」

大和が来たので後を任せようと思う。そう思い後を頼んだら

「谷口さんも鎮守府まで一緒に乗りますか？家まで近道になるでしょう」

「…そうだな。ではすまないが私も乗らさせてもらおう」

そして大和が運転する車に乗った。

「谷口さんは明日のご予定はあるんですか？」

「ああ、この前戦艦を建造したのだから少し早めに仲間にしたくなった



ので高速建造材を使い明日仲間しようと考えている」

「そうなんですか。なんか嬉しいです。私達のことを道具ではなく仲間として迎えてくれるなんて…横須賀鎮守府の子達が羨ましい。

たまにひどい時なんて名前すら呼ばれないんですよ？」

「それは最低な奴がやることだな。助けてもらつるという自覚がないんだ。私としては仲間という考えが普通だと思うのだが変なのか？」

「どうですかね…海に接して暮らしてる方達は道具扱いしませんが

陸地だけの方達には武器と呼ぶ人が多いそうです」

「完全に自覚がないだけじゃないか。そうゆう連中は自分で武器を持って深海棲艦に挑めばいい…まあ私はそれで死にかけたがね」

「それは私達を助ける為でしょう？嬉しいかったですけど…あれはもうやめてください」

「よほどのことでないとやらないさ」

そうやって話をしてる内に横須賀鎮守府に着いた。

「大和ありがとな。今日は助かった」

「いえ構いません…谷口さんは今から帰宅なさらないのですか？なぜ鎮守府に？」

「家で飲もうと思っていたのだが…今から帰って飲むのも明日に響く。実は寺内と飲んだんだがまだ飲み足りなくてね。鎮守府の私室に確かビールとつまみがあったはずだから飲もうかなと」

「！ 私も寺内さんを旧鎮守府に連れて行ったらご一緒してもよろしいですか☒」

「別にいいぞ。それなら私は食堂で準備しておくから行って来なさい」

「はい！大和！押して参りますー！」

私室に戻り自分の好きなお酒とつまみを取り出し食堂に行き、食堂にある余り物でさらにつまみを作った。大和型はよく食べらと聞くからな。少し多めに作ろう。

「お待たせしましたー！」

「お、ちようどよかった。今準備が終わったところだぞ」

そして私は大和にお酒を注いであげた。

「ありがとうございます。レモンサワーですか？」

「ああそうだ。日本酒はさつき飲んだからな少しジュース感覚で飲みたくてな。ほらそれにあうつまみを作っておいたぞ」

「いただきます……とても美味しいです！今作ったのですか？」

「余り物だがな昆布でやってみたが…キャベツにあうな。しかもレモンサワーにとってもいい」

そして私と大和は食べ始め色々と話した。

「この子達は恵まれてます。たしかに前は辛かったかもしれませんが…けどこうしてあなたが着任したのだから幸せになるに決まっています」

「だが私が移動になればまた変わってしまうかもしれない。今は復興を目標にしているからな。だがまだ地域の人達と仲良くできていない。ここで信頼を取り戻せないとまだ安心できない」

「どうなさるつもりですか？」

「来月辺りに市長と話すつもりでいる。はっきり言って今の状況では謝りに行くだけでは足りないかもしれない。誠意を見せろと言われるたらなあ…」

「賄賂などは？」

「それはまずいだろう。かなりの悪手だ。私の首でも差し出して収まるなら喜んで切れるが…」

「なりません！それだけは絶対やめてください！」

「落ち着いてくれ。それは本当に最悪の状況だ」

「そんなこと言われたら心配で仕方ありません。あなたはあなたの命がどれほど大切にされてるか理解できていません」

「そうか？私のような人間一人の命など平和になるのなら安いものだろう」

「そうゆうところですよ！市民達との解決になっても残された艦娘達はどうするつもりですか☒」

「どうするって…新しい提督が来るだけだろう？」

「仮に新しい提督が来てもおそらく彼女は幸せになりません。」

彼女達はもちろんこの国のためですがそれ以前にあなたのために

戦っているのです」

「それはないと思うが…」

「いえ絶対そうです！じゃなければこの演習のためだけの練習をするはずありません。あなたにどんな勝利でも捧げたい…そしてあなたに褒めてもらいたいんです」

「なるほど…たしかにそう考えても大丈夫だな。」

まあ、悪く思われてないなら今の私としては満足だ。ただでさえ最初は私が安心に導くか品定めされていたしな」

「それは仕方ないですよ。たぶん私も同じことをすると思います」

「そうだな…」

たしかに私は彼女達と仲良くやれているかもしれない。しかしまだ他の人間達から彼女達は武器と思われる。私がまだ動けるうちになんとかしないとな。

そんな風に2人で過ごしていたら0時を回り解散することになった。

そして私は家に戻り今一度なんのために私が提督を目指していたのか思い出していた。

新しく建造された子は不調のようです！

昨日の合同演習も過ぎ、朝ご飯を食べてから鎮守府に向かった。

鎮守府について執務室で仕事をする前に家に届いていた新聞紙を読んでいた。後輩の寺内が話しかけてきた。

「おはようございます！先輩！昨日は楽しかったっすねー！」

「そうだな。久しぶりに沢山話したな。寺内はこの後どうするつもりだ？」

「そうっすねー。一応視察なんでこの建物の中を艦娘達とおしゃべりしながら歩こうかなー。その後は娯楽室でゆっくりしてるっす」

「わかった。なんかあったら呼べよ？」

「了解っすー！」

「やあ、おはよう提督」

今日の秘書艦は時雨だ。執務室に今日の仕事の書類とコーヒーを持って来てくれた。

「ありがとう。時雨は秘書艦は初めてだろう？そろそろ大淀が来ると思うから来たら教えてもらいなさい」

「うん、そうするね」

寺内が執務室を出だ後大淀が入ってきていよいよ仕事が始まった。今日の演習内容、出撃するメンバーを確認し資材の調整をしていたら昨日からやろうと思っていたことを思い出した。

「時雨。午後に高速建造材を使い新しい子を迎えるつもりだ。君には電探を開発してもらいたいから一緒に来てくれないか？」

「わかったよ。新しい子か…少し楽しみだね」

彼女は少し笑ってからまた仕事に戻った。

時刻は12時。仕事を中断して二人を食堂に行つて来なさいといつて私は私室でご飯を食べた。たまにインスタントラーメンが食べたくなり昼に食べるのだが今日はカレー味を食べた。

昼休みにを終えて時雨が執務室に入ってきたので工廠と一緒に向かった。

「では時雨。レシピは燃料10、弾薬10、鋼材200、ボーキサイト

150で5回頼むよ」

「わかった。成功したらご褒美をお願いするね」

「了解した。ある程度なら了承しよう」

時雨と別れてから私は自分の手を叩き妖精さん達を呼んだ。

「たにぐちさんーどうしたんですかー?」

「ああ、すまないが戦艦をもう少し早めに仲間にしたくてな。高速建造材で早めに終わらせてくれないか?」

「わかりましたー!」

高速建造材を渡した瞬間ドックが光り始めた。

「長門型二番艦陸奥よ。よろしくね?」

「成功だな…!私はこの鎮守府を預かる提督だ。ようこそ我が鎮守府へ」

「初めまして。よろしくお願いしますね提督?」

ニコッと笑いながら私の前に歩いてきた。後ろでは妖精さん達が何か話し合っている。そこで私は陸奥の見た目に少し違和感を感じ訪ねてみた。

「陸奥?君の後ろに主砲がないようだ?」

「……え?…本当だわ主砲がない…」

どうやら陸奥自身も気付いてなかったようで本人もとても慌てている。妖精さんにどうしてこうなったのか聞いてみた。

「なぜ陸奥の装備に主砲がないんだ?」

「わかりません!」

「わたしたちも…おどろいてる!」

妖精達も皆目検討がつかないようだ。

「主砲がないだけなら今鎮守府にあるやつを使えば問題はない。

陸奥すまないが今から41センチ砲を持って来てもらうから待つてくれないか?」

「わかりました。申し訳ありません…わたしのせいで…」

「そう落ち込むな。君のせいじゃないさ。運が悪かったということかな」

妖精さんが主砲を持ってきてくれたので陸奥に装備させようとし

だが装備出来なかった。

「…なぜだ？」

「ごめんなさい！私にもわからなくて…」

「いや君を責めてるわけではないさ。他の主砲はつけれるのか？」

「もってきましたー！」

その後色々試したが41センチ砲がつけられないだけでそれ以外は装備できるようだ。

「お手を煩わさせていただいて申し訳ありません」

陸奥が泣きそうになりながら謝って来たのでちゃんと伝えた。

「そう気に病むな。たしかに今回は初めてのケースで多少驚いたが問題ない。私が開発で46センチ砲を手に入れば問題ないのだろうか？今この鎮守府にないがもう少し待っててもらえないだろうか？」

「問題ありません！私に46センチ砲がきたら絶対に勝利をあなたに捧げます！」

「提督。開発が終わったよ？5回中3回電探で2回失敗だったよ」

「時雨か…うむ十分だ。お願いは後で聞く。すまないが執務室に寺内を呼んでくれないか？」

「わかった。お願いは楽しみにしているね？」

「では陸奥。鎮守府内は私が案内しよう」

「はい、ありがとうございます」

陸奥を案内している間にこの鎮守府が以前どうだったのか話した最初は真面目に聴いてくれたが私が来てからの話は楽しそうに聴いてくれた。

「前からいる子達には悪いけど…ここにこれに本当に良かったわ」

「そう言ってもらえて嬉しいよ。まあまだここは復興段階なんだがな」

「そうやって話をしていたら執務室に来たので陸奥には今日は自由にしてくれて構わないと伝えて執務室に入った。」

「あ、せんばーい！おそついすよー？自分で呼んだくせにー」

「そう不貞腐れるな。寺内、少し真面目な話がある」

「そう言った瞬間さつきまでヘラヘラしてたのとは打って変わり真

面目な顔になった。

「話ってなんですか？」

「ああ、先程高速建造材を使ったところ陸奥が建造できたのだが…

主砲を持たずにドックから出てきた。そしてそのあと様々な装備をさせたところなぜか41センチ砲だけ装備が出来なかつた。46センチ砲はまだこの鎮守府にはないから試せてはいない。

本人にはつかれるだろうと言ったがおそらくつかれないだろう」

「なるほど。これは初めてのことです。杉田中将に報告しておきます。もしかすると陸奥さんに検査させて欲しいと言ってくる連中も来るかも知れないので気をつけてください」

「すまんが頼む。仲が良い検査官が来てくれるといいが…」

「まあ状況によりますね。他に何かありますか？」

「いや、それだけだ」

「了解です。では私と第一艦隊は大本営に戻りますね」

「ああ、また今度会おうな」

「近々行きますよ♪では失礼します」

そして大本営の第一艦隊と寺内は大本営に帰っていった。

大和とは連絡先を交換したので定期的に連絡することになった。

研究員はあの子を引き取りたいそうです！

「……それは本当ですか？」

「…ああ。すまないなどこかで話が漏れていたようだ」

「それは構いませんが…まさか1番嫌な連中が来るとは…」

「理解はできるがなるべく穏便に頼むぞ？」

「善処します。日程は明後日の午後一時ですね？」

「その通りだ。艦娘達からしたらいい話にはならないだろう彼等が来る所は防音にした方がいいだろう」

「そうですね。私も彼女達には聞かれたくありませんし…

では失礼します」

杉田中将から電話が来た。

残念ながらいい内容ではなかった。明後日に装備に異常が発見された陸奥について大本営から来る研究員と話し合わなければならぬのだ。なぜいい内容ではないのかというとその研究員達は艦娘を人間の武器だとして考えてない連中で大本営の中でも私や中将とは相入れない存在なのだ。奴らは艦娘は武器であると言っている連中の元凶でその研究内容は私からしたら気分が悪くなるものだ。

「北上。すまないが青葉を呼んでくれないか？」

「おつけ。少し待っててね」

今日の秘書艦は北上だったので青葉を呼んでもらった。あいつならおそろく盗聴器と録音機を持っているだろう。この前MVPで夕立を執務室で撫でたら他の子達からMVPの時にせがまれることに陥った。

みんなに聞いたら青葉から聞いたと言っていたから持っているだろう。

「提督、なぜ青葉さんと呼んだのですか？」

「万が一のためにな…気にするな。それよりも明後日大本営から客が来る。あまり他人に聞かれたくない話なので客間室で話す。後で妖精さん達に防音にしてもらえるように頼んでくる。その間は書類を頼むぞ？大淀」



「了解しました」

大淀にお願いをして執務を再開し、仕事を少ししてたら北上が青葉を連れてきた。

「提督く連れてきたよ」

「ども！司令官お待たせしましたー！青葉に話ってなんでしよう☒」

「北上ありがとう。青葉にはお願いしたいことがあってな？」

「して頼み事とは？」

「盗聴器と録音機を借りたい。お前そうゆう類の物持っているだろう？」

「そうゆう事ですか！？別にいいですけど何に使うんですか？青葉、気になりますー！」

「それは内緒だ。それに貸してくればこの前の件怒らないであげるぞ？」

「えー何のことでしょうかねー？し、仕方ありませんねーちゃんと返してくださいよ？」

「ありがとう：ちゃんと返すよ。だが次悪いことに使えば没収するからな？」

「気をつけます！では失礼しますね！」

「これで後は妖精さんに頼むだけか」

そしてこの後妖精さん達にお願いしに行き客間を防音にしてもらった。30分もかからないとは：さすがだな。

|||||

ついに研究員が来日する日がきた。門の前に大本営から来た車が見えた。そして私の前に止まり研究員達が私の前にやってきた。どうやら2人のようだ。

「ようこそいらっしゃいました。どうぞ、中へ」

「ご丁寧ありがとうございます。では失礼して」

客間室に案内して座ってもらったので今日の秘書艦である赤城がお菓子やお茶を持って来てくれた。

「粗茶です」

「おお有難い：最近は少し暑いですから。喉が渴いてしまいます」

「すまないな赤城：では執務室で仕事をして待つてくれ」

「了解しました。では失礼します」

赤城が出て行った後に笑いながら研究員は言い出した。

「いやいや、素晴らしいですな！この武器は良い教育が出来ているように」

言い方にいらつときたらやつかいな事になるので我慢しながら話を始めた。

「褒め言葉として受け取ります。単刀直入に話させていただけますが私の部下の陸奥の処遇はどうなりますか？」

「はい、このようなケースは初めてなので是非我々の所に引き取らせせていただきたいと思いますと思っております」

「……なに？それはなぜだ？」

つい言葉が強くなってしまったが彼等は気にせず語り出した。

「はつきりいつて我々大本営としてはこのケースには不安を抱いている。武器の不調など今後の戦いへの不安要素しかありません。しかし！今回のことを研究しなげ故障のような状況になったか解明出来れば対処ができます」

「もしその研究で解明できなかつたとして陸奥はどうなる？」

「まあ解体でしょうね。しかし安心してください。今回の武器を建造した分に少し上乘せした資材をこの鎮守府に送らせていただくつもりです。今回の研究では……」

…解体？こいつらは大切な部下を：人間に寄り添い一緒に戦ってくれるどころか我々を守ってくれる存在を道具としか思わず不調を欠陥といい今後の戦争に危険として解体するだど？

この時の私はもはや彼等の話は頭には入っていないなかつた。自分の中ではやらなくてはいけないことができてしまったからだ。

「……というわけでぜひうちで引き取らせていただきたいのですが？よろしいでしょうか？なに、また同じ兵器なら何度でも作れます。あなたからしたら悪くない話だと思いますがいかがですか？」

「ああ、決まったよ…」

決定してしまった。こいつらの処遇が自分の中で決まってしまった。

「本当ですか☒ではこちらに許可のサインを…」

…ここどこいつらをいなくたことにしよう…

「ではこの件はなかったことにさせてもらう。すまないが1分以内にこの鎮守府から出て行ってくれないか？」

「……………え……………」

そういつた瞬間私は奥に置いてある刀を取り出しあいつらの前で抜いた。

「お前らが言っていることは理解ができない！彼女達が武器だと？ふざけるな！武器は居なくなつた同じ武器を泣くのか？悲しむのか？

彼女達は確かに人間ではないのかもしれない！故に武器ではない艦娘なのだ！それをべらべらと上から偉そうにごたくを並べて兵器のように扱い自分達に危険がある可能性があるからといい解体など！お前らは助けてもらつているといふ気持ちがないのか！」

「いきなりなんだ！奴らは武器だ！兵器だ！艦装を出し化け物を倒せる化け物ではないか！それに命令するのだから武器と言つてなにが悪い！」

「うるさい！確かに彼女達から艦装は出る！だが艦装が武器なのであつてそれを扱えるのが彼女達だけなんだ！それを何だお前らは！彼女達は艦装を外せば外の世界に興味がある女の子達だぞ！さんなら簡単なことを理解できてねーてめーらみたいなのやつらを見ると虫唾が走るんだよ！今すぐにこの鎮守府から出てけ！もし今すぐに出ていかねーならその場になおれ！俺がこの場でてめーらを叩き斬つてやる！」

私はつい口調が元の状態に戻ってしまった。そして研究員の方に刀を振りながら進みだした。

「ひいひいひいひいー助けてくれー!」

「悪かった!もう言わないから命は取らないでくれ!」

「そう思っているならとつと出てけ!俺の気が変わらねーうちにこの鎮守府からな!」

そう言いながら研究員二人組は少しズボンを濡らしながら出て行った。

「…つち!やっぱり殺せばよかったか!」

少し冷静になり刀を元の場所に戻した。そしてお茶を飲み落ち着いてから執務室に戻った。

「すまない2人共。仕事を預けて……」

執務室に戻ったら赤城と大淀は泣いていた。

「……!どうしたか何かあったのかか!」

「…いえ違います。嬉しくて……」

「提督青葉さんに盗聴器を借りてましたよね?あの盗聴器この鎮守府の放送と連動出来るようになっておそらく青葉さんが設定し忘れていたのでしょうか……」

その言葉を聞いて一瞬頭の中が真っ白になった。そして素の状態で質問してしまった。

「つてことはさっきの話は……」

「はい、鎮守府にリアルタイムで流れていたでしょう。おそらく全てに」

私はその状態から気を失ってしまった。

あの子は思い悩んでるそうです！

「……見たことあるようなような天井だな……」

目を覚ましたら医務室の天井がみえた。どうやら倒れた後に誰かが運んできてくれたようだ。

「あら……やっと起きたのね」

「その声……陸奥か……」

陸奥声が聞こえた後に起き上がろうしたら私の頭の上に柔らかいものが当たった。

「陸奥……なぜ私は膝枕をされているんだ？」

「ここで寝てる時に辛そうな顔してたから……こうしたら落ち着いてるようにみえたから」

だんだん視界が良くなり思考も回ってきた所で陸奥目が少し赤いことに気付いた。

「そんなに心配されたのか……私は」

「心配はしたけど違うわ……娯楽室にいたら提督と来客の人達の声が聞こえてきて……最初は解体するって聞いて絶望したわ……でも提督がそれに大激怒した所で嬉しくなっちゃって……泣いてしまったの」

「まあ結局は私のせいか……すまないな」

「なに言ってるのよ。本当に嬉しかったんだから……他のみんなも私達のことを思ってくれてることに泣いちゃったり私の所にきて慰めてくれたり……ここに來れて本当に良かった」

「……そうか、それは後が大変だ。少し外に出たいな。付いてきてくれないか？」

「……ええ喜んで」

「では身支度を整えるから30分後に門の所へ」

「わかったわ」

そうして私達は一度別れ私室に向かった。途中誰にも会わなかったが今の私にとっては良かったことなので特に不思議とは思わなかった。

問題なく支度をし陸奥がいる門へと車のキーを持ちながら向かっ

た。

「待たせたな…」

「いいえ、全然。まるでデートみたいね」

「二人なんだからそうなのかな？まあ、車に乗ってくれ」

車に乗って目的地へ行く前に陸奥から質問があった。

「ねえ提督どこに行くの？」

「ヴェルニー公園という所だ。そこにはかつて日本の製鉄所を建設する為にフランスからきたヴェルニーという人がいたからその名前がついた」

公園についたら私は歩きながらその場所について話しながら奥へ進んだ。そして私が行きたかった所へ着いた。

「……………！提督これは！」

「これはかつて君が軍艦としていた時に君の主砲として使われた物だ。今は色が塗られて白くなってしまったがとても綺麗だろ？」

自衛隊の基地に近い所には軍艦の時に陸奥に装備されていた主砲が置かれていた。現在の海軍は2つに分かれており一つ目は我々のような艦娘を指揮しながら制海権を確保する為に戦う者とイージス艦などで戦う者に分かれている。戦争開始直後はイージス艦の攻撃は深海棲艦には効かなかったが妖精さん達が作ってくれる弾のおかげで攻撃出来るようになったが船底などに攻撃されると簡単に沈んでしまうため主に迎撃のために使われる。

「ここには君がかつて奮闘した話が簡単にだが説明されている」

「提督はこれを見せたくてここに連れてきてくれたの？」

「さてな…私は君に41センチ砲がつかない理由は君のこの火薬庫という所だと思うんだ。君は今自分に自信がないのだろうか？」

「…ええそうよ。ここに書いてあるように私の火薬庫が爆発してしまった原因で私は沈んだわ…みんなに期待されて造られたのに…私はみんなの期待に応えることが出来ないまま沈んでしまった」

「やはりそう思っていたか…すまんが着いて来てくれないか？君にまだ見せたいものがある」

そういつて私は彼女の手を持ち少し先にある建物の中に入った。

そしてその建物の中にある物を彼女に見せた。

「提督…この模型って…」

「かつての君を模型にしたものだ」

彼女が模型を見てる時に私は話を続けた。

「私はね陸奥…誰も君の事を恨んではないと思うんだ。なぜなら火薬庫が爆発して沈んでしまった君にこのようなことをしなと思う。」

しかも知ってるかい？あるお店には君のお菓子が売っているんだぞ？」

私は私が出来る限りの笑顔で彼女に伝えた。そして彼女は泣き出してしまった。

「私は…私はこの人の様な身体になってよかったのかな…」

それは陸奥の時に自分のせいで亡くなってしまった人達に向けて言っているように聞こえた。なので私は彼女に何度も伝えた。

「平気だよ陸奥…君はその身体になってよかったんだ。そして君と共に戦ったかつての仲間達に今の君を見守ってもらおう」

「……………そうね。今みたいにメソメソと悩んでる方が彼等に申し訳ないわ。……………提督。明日から私に開発を任せてもらってもいい？」

「もちろんそのつもりだよ！おそらく今の君なら46センチ砲を装備できるだろう！そしてかつての仲間の為に奮闘してくれ！」

「ええ！任せて！」

今の彼女の顔は思い悩んだ顔はなかった。誰かのために…かつての仲間にも認めてもらうという覚悟を決めた良い顔をしていた。

「では戻るとしよう…無断で出たから心配されてしまうかもしれない」

「そうね！戻りましょう」

陸奥に手を繋がれたのでそのまま車に戻り鎮守府へ帰った。時刻は20時腹もいい感じに空いたので到着しだいすぐに食堂へ向かった。

「!!!おかえりなさい!!!」

着いた瞬間にみんなから盛大に言われてしまった。周りを見渡したらせつせと何かパーティーする様な準備をしていた。

近くにいた那智にどうゆう状況かを尋ねてみた。

「那智…これはどうゆう状況なんだ？」

「提督の熱い話をした事を今日出撃したメンバーが教えてもらった後に一応録音されてたからな。みんなで聴いてきたら金剛がな…」

そう言った瞬間待ってたと言わんばかりに金剛がやってきて説明してくれた。

「テイトクの熱い speech を聴いて感動してしまいましたター！そこでこの happy な気持ちをみんなと共有したくて party を開くことになったのデース！」

理由が無茶苦茶だが今回は私の恥ずかしい所が原因のようなので強く言えなかった。

「わかった…だがあまり騒ぎすぎるなよ？明日に響くからな」

「そこは No Problem ヨー！明日出撃する子達はお酒は飲まないネー！」

「それなら問題はないな。では初めてくれ」

「何を言っている？乾杯の音頭はあなたにやってもらうぞ？」

「さあていとくー？私に Follow me！ついてきてくださいネー！」

金剛に引つ張られて私はみんなから見られるところに立たされてコップを渡されてしまった。

「みなさん！ていとくからカンパイの sign があるネー！聞き逃したら No なんだからね！」

金剛がそう言った瞬間、周りから雑音が一斉に消えた。どうやら逃げ場はなさそうだ。

「やるしかないか…では皆聞いてくれ！今回はっきり言って私には何がこの場の原因かはあまりわからん！ただ私のせいだという事だけはわかるから細かいことは言わん！君達にとっては大事なことなのだろう！やるからには盛大にやれよ？ 乾杯だ！」

みんな手に持つてるコップを上に掲げ一気に飲んだ。

そこからどんちゃん騒ぎが起こり夜まで続いた。



## 第六駆逐隊は釣りに行くそうです！

「何？釣りに行きたい？」

「なのです！明日電達は4人とも休みなのです！提督さんも休みなのを知ったので提督さんと一緒に行きたいのです！」

「特にやることもなかったし別にかまわないが…君達は釣竿を持っているのか？」

「はわわ…そうでした！電達は持ってないです…」

「そう落ち込むな…明日私が後で買いに行こう…餌は朝買いに行くか」

「本当ですか！ありがとうございます！」

電と別れてから執務をしてから休憩中に鎮守府から近い〇州屋へ向かった。

四人の身長的に大きい釣竿はダメだな…子供サイズのを買おう。釣り場は近くの公園だから12号と13号、そして1.5号や2号を買おう。餌は生きてるのは無理そうだからオキアミにしよう。

色々購入してから車に入れて鎮守府に戻りまた電を執務室に呼んだ。

「提督さん！失礼するのです！」

「やあ司令官…私もきたよ」

「よく来たな、ん？響も来てくれたのか。明日の準備はしておいたから行く時間を決めようと思ってな」

「司令官は何時に行くつもりなんだい？」

「私はやるなら本格的にやりたいから朝の5時くらいに行くつもりだ」

「それは早すぎるのです！暁と電は起きれないです」

「それは安心してくれ。釣り場は鎮守府の隣の公園だから好きな時間に来てくれて構わない」

「それなら私は司令官と朝からやるよ」

「わかった。餌は朝買うつもりだから5時半くらいにきてくれ」

「了解（なのです）！」

そのまま2人は仲良く戻っていき、私もそのまま何もなく家に帰り明日の準備をした。

次の日になり天気は快晴だった。

私は朝5時に家を出て近くのOointに行き餌を買ってから公園に向かった。

4人が来るまでに四人分の釣竿の準備をしてる時に後ろから話しかけられた。

「やあ、司令官きたよ」

「よく来たな響、他の3人はどうした？」

「3人はまだ寝てるよ。多分8時くらいにくるんじゃないかな？」

「そうか。はいこれ響の竿だ」

「スパシイーバ」

「鰯を釣りたいからなこのカプセルのようなところに餌を入れてくれ。溶かしてあるから簡単に入るぞ」

「了解だよ、司令官」

餌を入れ釣りを始めてからおよそ1時間で近くに鰯の群れがやってきた。

「鰯の大群が来たな。響ここから餌を入れないでいいぞ」

「え、どうしてだい？普通大群がきたら餌で誘うはずだけど」

「見てればわかる…とりあえず投げてみる」

響は不思議な顔をしながらとりあえず餌なしで投げてみた。

そして響の投げた針に数匹の鰯が来て3匹近く釣れた。

「ハラシヨー。こいつは力を感じる」

「な？大群だと餌が無いのに釣れるんだ。私も小さい頃に父親に教わってやり始めたんだがよく釣れるだろ？」

「ほんとだねもう10匹くらい釣れたよ」

「しかし大群は一度きたらしばらくこないからな…まあ気楽に待つか」

そのままさらに時間が経ちついに暁、雷、電がやってきた。

「司令官きたわよー！」

「雷か…しかしけっこう遅かったなもう10時くらいだが…」

「暁がなかなか起きなかったのよ！昨日夜更かしするって言って22時に寝ちやうから朝起きれないのよ！」

「面白いテレビやってたから仕方ないじゃない」

「22時は早いと思うが…」

「提督さん。暁ちゃんはいつも21時前には寝ちやうのです」

なるほどといいながら3人に私は釣竿を渡した。

そして五人で釣りを始めた。

午後15時になりみんなでおやつを食べながら話してからまた釣りを始めた。

「みんななんでそんな釣れるのよ！私まだ1匹しか釣れてないわ！」

「落ち着け雷。それならこの針にして針一つ一つに餌をつけて下に垂らしてみろ」

「わかったわ……え、すごい魚が！たくさん釣れたわ！なんで☒」

「その魚はタナゴといってな。骨が多いが煮込めば美味しく食べれるんだ」

そのまま釣りをしていたら16時ぐらいに白露型の子達がやってきた。

「あ、提督だ！釣りしてるっぽい？」

「夕立？それに白露型の子達か？暁達と釣りをしているが君達は？」

「遠征がさつき終わったらみんなで遊ぼってことになってね。これからバスケやるんだ」

「そうよ！白露がいつちばーん点決めるんだから！」

「そうか楽しんでくれ、鰯が沢山釣れたから夕食は鰯づくしとタナゴの煮込みだぞ」

「楽しみっばい！」

そのままゆっくりと時が経ち夕陽が沈んできたので白露型も一緒に帰った。意外と五月雨がドリブルがうまかった。

「たくさん釣れたのです！」

「ハラショー！これは酒のつまみが楽しみだ」

「レディだから早く戻ってお風呂入りたいわ！」

「間宮さんを手伝ってみんなに食べさせてあげたいわ！」

「提督？今度は僕も連れてってね」

「別にいいぞ、他の釣り場に行ってみるか」

「二人でずるいっぼい！夕立もいく！」

「夕立姉さん！提督にだきつかない！」

「私も行く！いっちばん釣るんだから！」

「私は遠慮しときます…針がよく絡まるので…」

「五月雨はおっちょこちよいだからねー。村雨もパスかな、髪が痛みそうだし」

「てやんでえ！んなこと気にすんなよ村雨姉！どうせ入渠で元にもどるんだからよ！」

わやわや戻りながら私は間宮達に魚を渡してから一度公園に戻り車を取りに行った。そしたら響もついてきたので一緒に向かった。

「司令官。今日はほんとにありがとう」

「なに私も楽しかったから気にすることはないよ」

「今度二人でどこか行きたいな。魚関係で水族館とかはどうだい？」

「二人か…できたらな」

「約束だからね？」

車の前で街頭で見れた響は顔を少し顔を赤らめていた。

「そうだな」

私は少し見惚れてしまいその一言しか言えなかった。

車に鎮守府に戻りみんなの間宮の魚料理たらふく食べて盛り上がった。お酒を飲んでしまい何人かが二日酔いで苦しんでしまった。

## 市長さんがやってくるそうです！前編

「提督、新しい子が建造されました」

「ん？そうかついにきたか？今から向かおう」

前に陸奥と一緒に建造した子がついに出来たようだ。そして2日前に建造した新しい駆逐艦も来たようなので今日は二人新しくこの鎮守府に入るということになる。

「あ、ていとくさんだー！」

「たにぐちさん！おつかれさまです！」

「ああ、お疲れさん。新しい子はどこにいるのかな？」

「こちらです！」

「こんかいはじしんさくです！」

「わたししっぱいしないので！」

工廠につき色々な妖精さんに囲まれながら新しい子がいるドックへ向かった。建造に頑張った子達には金平糖を配りながら今回の新しい子について聞いてみた。

「今回はどんな子達なんだ？」

「はい！げんきがよくてあかるいです！」

「それは楽しみだな：賑やかなのはいいことだ」

ついにドックの前につき向こうから新しい子達だと思われる二人が歩

いてきた。

「君達の名前は何かかな？」

「はい！翔鶴型航空母艦二番艦の瑞鶴です！よろしくね？提督さん」

「次に陽炎型駆逐艦八番艦の雪風です！しれえ！よろしくお願いします！」

「そうか、元気があっていいな。私がここの提督だ、よろしく頼む。

さっそくだがここを案内する。私はこの執務があるから失礼するが今日の秘書艦は時雨だから彼女についていってくれ」

「よろしくね二人とも、まずは食堂を案内するからついてきてね」

「わかったわ」

「はい！よろしくです！」

そこから時雨達とわかれて執務室へ戻った。執務室へ戻ると大淀から伝言があった。

「提督、おかえりなさい。先程市長さんから電話がありました。あなたと話がしたいそうです」

「そうか、おそらく私がここを任せられる人に値するかみたいのだろう……あの市長はいい人だからな」

ここ横須賀に住んでいて知らない人はおそらくいないだろう。この市長は地域にとっても力を入れていて様々な行事に積極的にきている。

私が小さい頃から行事で会ったことがある。地域の餅つき大会など小さいイベントからカレーフェスティバルなどの参加もしている。私もそういう場面で握手をしたことがある。

「優しい方なのですか？私達はお会いしたことがないのでわかりませんが……」

「知らないのか？前任のことを大本営に言ったのは彼だぞ？地域の人はどうすればいいかわからなくて彼に相談して発覚したんだ。君達にとって彼はヒーローといえるだろう」

「本当ですか？それならぜひお会いしてお礼を言いたいですね」

「そうだな……なら彼には申し訳ないが鎮守府に来てもらおう。多忙なのは理解してるがみんなにちゃんと今のことを伝えればお礼をしたと言ってくるだろう。では今から電話してみるか」

執務室においてある電話の受話器を取りだし電話をした。

「もしもし」

「市長さんですか？私は横須賀鎮守府の提督として着任しました谷口真と言います。先程電話をいただいたとのことですがかけてもらいました」

「そうか、話したいのは今後の君の方針や艦娘達への君の対応などだ。海軍はすぐに提督を探してもらったが同じことをしていたら意味がないからな……ぜひ君と会いたいのだが」

「それについては問題ありません。日にちについては市長さんのご都合がある時で構いません。しかし場所は鎮守府でよろしいですか?」  
「私はこうみえて忙しいのだが……今の感じだと理由があるな?なぜだ?」

「はい、市長さんが忙しいのは重々承知ですが、私の部下である艦娘達があなにお礼を言いたいということですから、そういう機会を彼女達に与えてあげたいのです」

「なるほど、そういうことなら君の鎮守府に出向くとしよう」

「ありがとうございます。いつ頃が大丈夫でしょうか?」

「私も会いたいと思っていたからな。明後日を開けてある。そこでよろしいかな?」

「問題ありません」

「時間はそうだな……午後はやりたいたいことがあるのめ朝の9時でもいいかな?」

「かしこまりました。楽しみに待っています」

「そうかでは失礼する」

「はい、ありがとうございます」

「提督、いついらつしやるのですか?」

「明後日だそうだ。後でみんなには食堂で新人の歓迎会と共に伝えよう」

「了解です」

予定がどんどん作られていくと執務室のドアが叩かれた。

「入っていいぞ」

「失礼するよ提督…案内が終わったよ」

「助かるよ時雨。後ろの二人は見て回ってどうだった?」

「広くてびっくりしたわ。翔鶴姉がいないのは残念だけど……それ以外は問題ないわ」

「そうかなるべく早く着任できるように頑張ろう。雪風はどうだった?」

「はい!とても綺麗で驚きました!娯楽室も楽しそうで遊びたいです!」

「休みの日なら相手をしてあげよう。では二人にこれからのことを伝える」

そう言い放った瞬間二人は真面目な顔になった。

「まずは二人には演習班に入ってもらおう。瑞鶴は練度が60になるまで続けてくれ。それと演習以外にも赤城からある練習をつけてもらってくれ。この練習はかなり難しいから心が折れないようにな」

「任せて！やっつてやるわよ！」

「いい返事だ。雪風は練度が50になったら天龍達と遠征に出てもらう。遠征で体が慣れてきたら出撃してもらおうつもりだ。あと訓練として陸で避ける訓練を受けてもらう。これは神通に任せてあるから彼女に聞きなさい」

「わかりました！しれえのお役に立てるように頑張ります！」

「頼むぞ。この後は食事までは何も無い。娯楽室や自分の新しい部屋を見に行ってみるといい。今日は二人の歓迎会だから楽しんでもれ。」

「了解」

二人はそのまま執務室を出て行ったので執務を再開し19時になったので食堂へ向かった。

「あ、提督！お早い到着ですね！」

「ああ、みんなはもういるな？」

間宮に返事を返し周りを見渡した。もう全員いるようなので私も椅子へ向かいそして大淀からマイクを渡されてみんなに話しかけた。「まず歓迎会の前に聞いてくれ！明後日の午前9時ごろに市長がこの鎮守府にくる。彼は君達が酷く扱われていたことを大本営に伝えてくれた張本人だ。彼にお礼が言いたい子達は私の所に明日きてくれ、以上だ。」

では乾杯しよう！」

机の上にあった私のグラスを手に取りみんなで乾杯をした。歓迎会は盛り上がり大成功だった。着任して約一ヶ月でかなり宴をしているが…まあ、最初は盛大にだな。明るく行こう。



## 提督との絆〜金剛編前編〜

「もう沈むのかな……後は頼みますよみんな……」

私こと金剛初めての戦艦として日本に来て自分で思うのもあれだがかなりの戦果を挙げた方であると思っていた。そんな中改修などを重ねて装甲が薄くなったりしていたことで敵艦の魚雷が私に当たった瞬間自分が沈むことを悟りみんなの無事を祈ることしかしなかった。

「味方艦がやられているぞ！即座に撤退だ！」

そんな中私の中にいる乗組員の声などが聴こえてきて撤退していることに気付いた。しかし現実是非情なものであり魚雷が刺さってからまもなく私は転覆してしまった。

自分の心臓部分である機関も停止しかけいよいよ沈むとなるときに私の中で爆発が発生し乗組員はその爆発の犠牲になってしまった。

「！」

私の中で爆発したことを感じた私は自分の不甲斐なさに後悔することしか出来なかった。

……守れなかった……

……私のせいで守れなかった……

自分の中で叫んでいるのが聞こえてきながら私は自分の心を閉ざしてしまった。そうでもしないと自分を保つことが出来なかったからだ。

ついに私は海の中に沈んでしまった。沈んで行く中で周りの光景を見て不思議と落ち着いてしまった。

「私以外にもこんなに沈んだ子達が……」

ああ、もう疲れた。私はそんなことを考えてついに眠りにつこうとしていた。

「みんなグッバイね……あとは頼むヨ……」

そう言い残し私は海の中で起きることはないだろう眠りについた。

|||||

カーンカーンカーンカーンカーン

……何の音だろう……私はもう聞こえるはずのない音が聞こえる……

私は眠いんだ頼むから起こさないでほしい……そう思いながらその音を無視した。

カーンカーンカーンカーンカーン

うるさい！そう思い私は自分の耳を塞いだ。

……え？……塞いだ……？

自分の異変に気がつく。私は自分の眼を開いた。

そこには沢山の小さい女の子達がいた。

「けんぞうせいこうですー！」

「じょうじょうねー！」

奥で他にも喜んでいる子達が沢山いた。

「これは……どうゆうことネ？」

私が眠っていた。隣に鏡があつたので自分の姿を見てみた。

「これが私なの……？」

肌をかなり露出させた巫女服。ドーナツ？のようなカチューシャ自分の姿を見ている内に自分の中に様々な情報が入ってきた。

日本は戦争に負けて変化をしていくうちに突如現れた深海棲艦……

そして私、金剛はそいつらと戦いこの新しい戦争に勝利しなければならぬなどを少しずつ理解しながらふと笑顔になってしまった。

「また……みんなと戦えるネ！今度こそ……今度こそこの国を守るヨ！」

私がやる気を出していたら工廠の入り口から誰かが入って来たのが見えた。

「……貴様が新しい艦娘か？」

「ザッツライト！私が英国で生まれた帰国子女の金剛デース！ヨロシクオネガイシマース！」

名前を聞かれた瞬間私は自己紹介をした。この人が私の提督になるのかな？しかし何故か嬉しくはなかった。心の中で不思議に思いながら彼が歩き出したのでついていった。

「さっそくだがお前には出撃してもらおう」

「了解ネー！期待してネー！」

出撃出来ることが少し楽しみで一緒に出撃する場所に小走りで向かってしまった。

「あれ？金剛さんここに着任したんですか？」

「矢矧！久しぶりネー！さっき建造されたんだヨー！これからもよろしくネー！」

「あはは…あなたは相変わらず元気ですね」

「そうゆう矢矧は元気ないネ。どうしたの？」

「ここでは話せないので海の上で話ますね？」

そう言われて私は第一艦隊に入りこの鎮守府について説明を受けた。

どうやらさつき会った提督は優しい人ではなく最近いうブラック提督であり私達の事は武器としてしか考えずにきついスケジュールを作る人らしい。

「！敵影発見！攻撃に移ります！」

説明を受けていたら砲雷激戦が始まった。

私は初めての出撃なのでかなり気分が上がっていたので戦っている時に敵の砲撃に気付くことが出来なかった。

「危ないです！金剛さん！」

そう言われて神通が私を庇って被弾してしまった。

敵は殲滅出来たので私は被弾して中破してしまった神通に大丈夫

が聞いてみた。

「大丈夫デスカ？ソーリーネ、神通…」

「初めての出撃なんですから仕方ないですよ。気にしないで下さい」

そう言つて微笑んだ神通を見て思わず抱きついてしまった。彼女は困ったように対応していたがその瞬間に無線が聞こえた。

「進撃しろ」

この音が聞こえた瞬間に無線は切れた。

「一人中破してるのに進撃つてどうゆうコトネ？」

その言葉を聞いて私は怒りを感じてしまった。そしたら矢矧は悲

しそうな顔をして私に言った。

「仕方ないですよ金剛さん…私達は兵器なんですから司令官の命令は聞かないと…」

絶句した。確かに私達は元々は軍艦だ。軍艦の時は今で言う九十九神の類かもしれないが言葉や動作はないが考えることが出来た。しかし今の私達は人と同じ見た目をしているし、言葉も発する事が出来るのに私達をただの武器としか考えてない提督に怒りや驚きを隠せないでいた。

その後は神通を守りながら戦い最終地点で勝利を収めて帰還することができた。

鎮守府の中に入り6人で執務室に向かった。扉をノックして中に入れと言われたので中に入るとそこには泣いている軽巡の子がいた。

「提督！何してるネ！」

「何って遠征に失敗した罰として殴っただけだが？」

「だって…泣くまでやることですか☒」

「当たり前だ。お前らは私の武器だぞ？お前らが失敗したら私にメリットはない。だからこそこうやって次は失敗しないようにしてるだけだ。まあ、ほとんどが私の気まぐれだがな」

「そんなこととして許されるわけないネ！大本営に報告するヨ！」

「騒がしい奴だな…なら他のお前らこの情けない奴を連れて執務室をでろ」

泣いてる子を非情にも蹴りながらみんなその命令を聞いて退出していった。

「さて金剛だったか？お前には確か下に三体くらい妹がいたな？」

「そのとおりネ…」

「お前は運が良かったな。その三体とも私の武器としてここにいるぞ？嬉しいだろ？」

「それは嬉しいことネ。でもなんでそれをここでいうの？」

「早い話私の命令を聞けばそいつらには手を出さないでやろう」

「…！…どうゆうつもり…？」

「お前が私の命令にただ従っていればあいつらを私の慰め者として使うのをやめてやろう。身体は人の形をしてるからな、しかも容姿はかなりいいときた。とても美味そうだとは思わないか？」

「下衆が…」

「その感じたと理解したようだな？わかったならさっさと戻れ。また働いてもらうぞ？」

私は怒りながらこれから自分の部屋になる部屋に戻った。

扉を開いた瞬間、私に一人飛びついてきた。

「お姉様ー！お久しぶりです！」

「比叡！久しぶりネー！」

「金剛お姉様！榛名！感激です！」

「お久しぶりお姉様。これで全員揃いましたね！」

3人の嬉しそうな顔を見て覚悟した。今度こそこの笑顔を守らないと。

気に入らないがあの話にならなければいけないと思ってしまった。そこから3人から今の日本について様々なことを教えてもらった。だが今の流行とかは分からなかった。提督がそういう類の物を置いてくれないらしい。武器にそんなこと必要ないだろという考えだと思ふ。

霧島が今日は4人で寝ましょう！と提案があつたので布団を近づけて4人で眠った。眠るなんて初めてのことだしドキドキしたが妹達の寝顔を見ていたら安心したのか瞼が重くなってきたて眠ってしまった。

## 提督との絆〜金剛編中編〜

「爆発するぞ！早く逃げろ！」

「助けてくれ！まだ機関の近くにいます！」

「もう無理だ！浸水がかなり酷い！あいつには悪いが……早く逃げろ！」

軍艦だったころの記憶……

みんなが悲鳴をあげながら私の中から逃げようとしてる記憶……

その声からそむけたくて耳を塞ぎたいのに今の私に塞げる耳はない……

「爆発したぞ！逃げ！」

「あづい！だれがダズゲテグレー!!？」

「手をこっちに！海に飛び込めば火は消えるぞ！」

「無駄だ！もう海には燃料がかなり漏れてやがる！逃げ場がねー！」

みんなと沈んでいく……私の舵を握っていた人……私の上で仲良く歌っていた人……みんなが沈んでいく……

「なんで魚雷が来るんだ……」

「なんでこのまま負けるんだ……？」

「……憎い……」

「憎い……全てが憎い……」

やめて！聞きたくない！私はこれが夢なんだと思いながらみんなが歪んでいく所を目を逸らせないまま自分の意識が消えていった。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

「金剛お姉様！大丈夫ですか？」

「んー……その声は榛名デスか？」

「はい！榛名です！お姉様すごいなされていますが大丈夫ですか？」

榛名が起こしてくれたおかげで夢から目を覚ますことが出来た。あのまま見続けていたらたぶん私は今のままで入られたかを考えた

らぞつとした。

考えるのはやめよう…

「もう大丈夫ヨ榛名！起こしてくれてサンキューネ！」

「それなら良かったです！比叡お姉様と霧島は先に食堂に向かっているので向かいましょう！」

「了解ネ！汗かいてるからオフロ入ってくるよ！榛名も先行つてもいいヨ？」

「いえ！金剛お姉様を待ちます！」

シャワーを浴びてから私は榛名と食堂に向かい食堂でご飯を食べて出撃しました。

|||||

あれからそんなに日がたたない内に提督はいなくなった。

運が良かったと思いつつながら新しく来る提督はどんな人なんだろうと気持ちを切り替えながら大淀の指揮に従いながら待っていた。

3日に1度にあの悪夢を見る……いつもの場面で姉妹が起こしてくれるおかげでなんとか自分を保ちながら過ごしつついに新任提督が着任する日がやってきた。

「新しい提督さんどんな人なんでしょう？」

「金剛お姉様。少し見に行きますか？」

「その必要はナイネ霧島。みんなからジロジロ見られたら不安がられちゃうネ！食堂で会うから今はおとなしくしよう！」

「流石金剛お姉様！とても素晴らしい考えです！」

放送で食堂に全艦娘が呼ばれたので四人で話しながら向かった。

大淀の目が赤いので何かあったのかな？と思いつつながら提督を目の当たりにした。

「私がこの横須賀鎮守府で提督をすることになった谷口真だ。前任の……」

私は彼を見て確信した。この人だ！この人が私の……私達の提督だ！

私はそのことに喜びを感じしばらく彼の話を聞いていなかった。

「ではまず第一艦隊からメンバーを言う！呼ばれたメンバーは最後に全員で声を上げてくれ！」

第一艦隊！那智を旗艦とし金剛、榛名、赤城、初春、神通だ！」  
私の名前が呼ばれた！彼は私に期待してくれてる！

「このメンバーは主に海域突破だ！そのため一番過酷で大変だよってくれるか？」

「もちろんネー提督ー！ワタシがいれば余裕ヨー！期待してネー！」  
嬉しさのあまり声を出してしまった。

そして提督の話が終わり退出した後みんなは彼の話に盛り上がった。

「新しい提督さん優しそうですね！榛名嬉しいです！」

「明日から楽しみね！気合い！入れて！いきます！」

「資材の確認書渡しに行かないと…お姉様、すこし外れますね」

「了解ネー！部屋で待つてルヨ！」

部屋に戻り姉妹達とおしゃべりしながら眠りについた。眠りにつく前の私は提督にどんな話をしようか考えていた。こんなに眠る前に気分がいいのは初めてだ。

そうだ！明日提督に紅茶を買えるようにお願いしてみよう！そんなことを考えながら比叡が私の布団に入って来たのをスルーしながら私の意識は眠った。



## 提督との絆〜金剛編後編〜

「失礼シマース！」

「金剛か……どうした？」

私は提督とお話をするために執務室に入った。

朝方どんな話をすればいいか姉妹達と話し合いお茶会に誘うことになった。

「提督！私達とティータイムをするデース！」

今日の仕事量は少ない事を知っていたので（大淀情報なので間違いない）完璧なタイミングで入っただろうと確信していた。

「すごいな、今しがた終わったところだから今からいけるぞ」

心の中でガッツポーズをしながら私はニコニコした状態で提督の手を引っ張って連れて行った。

「それなら善は急げネー！早くレッツゴーヨ！」

「そんな急かさないでくれ……」

部屋に向かうまで提督とは紅茶の話をたくさんした。

「提督が着任してから明石ショップの品が豊富になったネ！」

「それは良かった。紅茶は明石の所で買ったものか？」

「紅茶は明石ショップデスがお菓子は初めて外でショッピングした所で買った物デース！期待してネ！」

「なるほどそれは楽しみだな。そういえば横須賀に美味しい紅茶を出すお店があったな。今度場所を教えよう。4人でま行ってくるかい」

「リアリー☒サンキューネ！」

こんな会話をするなんて初めてでとても楽しい。私は建造されてから鎮守府の外へ出たこともないし知れる機会も今までなかったから新しく何かを知れることが嬉しかった。歩いている時に会う子達も笑顔で提督に話しかけている。前までが逆に嘘だったかのように

ああ、私今幸せなんだ。そう理解した瞬間目の奥が熱くなってきた。

「ん？どうかしたか金剛？」

「な、なんでもないデース！もう少しハリーで行くヨー！」

ついに私達の部屋についた。提督がノックしてくれて中から榛名が返事をしてくれた。

「入ってもいいかな？」

「はい！榛名達は大丈夫です!!？」

「では失礼するよ……綺麗に整っているなあ」

「はい！司令官が来てくれるという事で気合い！入れて！掃除しました！」

「比叡お姉様？その言い方だと普段は汚いみたいな感じに聞こえますよ？」

「提督、今回は提督がいらしていただけたということでお机や椅子などの配置を変更したということですよ」

「そうか、わざわざすまなかつたな」

「気にしないでください！私達も提督とお話しするのをとても楽しみにしていたので」

「そういつてくれると助かるよ」

いよいよお茶会が始まり私達は提督に様々な質問を投げかけた。

「提督はなぜ海軍に入ったのですか？」

「最初はなんとなくかな。友達に誘われて一緒に入ったんだがその友達はやりたいことを見つけたらしく途中でやめてしまったよ」

「そうだったんですか…それだとそのご友人には感謝しないといけませんね！」

「司令官はカレーは好きですか？」

「カレーか？もちろん好きだぞ。カレーフェスティバルとかは毎年行ってる」

「カレーフェスティバルって何デスカー？」

「え、知らないのか？毎年横須賀の○笠公園でやってるお祭りのことだよ。海軍カレーなども売っていて私は霧島カレーや金剛カレーを食べたことがあるぞ」

「リアリー☒そんな面白そうなフェスティバル知らないネー！」

「なら今年はみんなで行けるようにするか。鎮守府は大本営の第一艦隊にでも任せておこう」

「それはそれで第1艦隊の方達がかわいそうですね」

「今度飯に誘えばなんとかなるだろう」

「提督とご飯…！羨ましいです！」

「まあ時間があればみんなで行くかうか」

「提督は学生時代何をしていたのですか？」

「学生時代かあ…散歩をすることが好きだったぞ、今も好きだが。」

家の周りの慰霊碑やら戦争の跡地などをみて回っていた」

「なぜそのようなことを？」

「お前達はその時には言い方が悪いが沈んでしまっていたから知らないと思うが日本人はアメリカ人にクレイジーと言われていたんだ」

「ひどい話ネ！私達をバカにするなんて！」

「いや、そう意味ではなくてだな…霧島はなぜ戦うのだと思う？」

「それは国を国民を守る為ですかね」

「そうだな、その為にお前達は死ぬるか？」

「当然ですよ！私達は沈むのは怖かったです…日本の為に沈んだと考えると大丈夫でした！」

「そこだ。アメリカ人は家族の為に生きる為に戦うのに対して日本人は家族の為に死ねる…そこがクレイジーと言われていたんだ」

「なるほど、馬鹿にする方ではなく夢中と言う方の訳し方なのです」  
「その通りだ。そこで私は気になってしまった。何故日本人は国の為に死ぬことが出来たのか。人間って本来怖がりな者のはずなのに何故特攻出来たのか。私の考えとしてはその日本には自分の命を犠牲にしてまで守る価値があるからだと思った」

「確かに人って得体のしれないものを見たり感じたりするとすぐに拒絶しますもんね…」

「すまないな、嫌なこと思い出させてしまった」

「気にしないでください！けど司令官と会えたことで人によつては違うことを考えている人だっていることに気付けたのですから！」

「そうか…そう言われると照れるが…」

さっきの話に戻るが私は戦場を駆けて散って行ってしまった人達について調べることにした。君達が建造された時はどんな気持ち

だったのか、君達と戦う時はどんな気持ちだったのか、君達と沈んでしまった時の兵士達はどんな気持ちだったのか、そんなことを考えながらね」

「提督は調べてどう感じたのデスカ？」

私はこの質問をする時にいつものような感じでは聞かずに真剣に聞いた。彼は一瞬目を開いたが私の今の質問の重みを感じたのか真顔になって考え出した。

「……はつきりいって素晴らしいと思うよ」

「それは何故？」

「実のところをいうと私は今の政治が嫌いでね。すぐに解決出来る問題は後回しにし国民を仕事で殺すかのように働かせている。そしてその努力への褒美は圧倒的足りなさ。そうやって今の社会への不満を考えながらの私の考えは少し羨ましいかな」

「ますますわからないネー。提督は私達と沈みたいと思ってるってことデスカ？」

「それも魅力的だけどな。さつきも言ったけど私は自分の身を捨ててまで国を守る価値があったことが羨ましいと感じた。仮に今から他国との戦争があってもこの国の為に戦いたいと思つて戦う奴らなどはとんどいないだろう。そう感じたときには羨ましいと思うようになっていたよ」

「確かに今の日本人では不満しかないでしょうね」

「そうだろう？ 私は仮に私自身が君達と戦つて死んでいくのだとしたら私は国の為に喜んで死ぬるだろう。おそらくだがな」

「提督は死にたいということですか？」

「それはダメですよ！ 榛名は止めますよ！」

「違う違う。私は君達と全力で戦いそれで負けてしまったのならスッキリした状態で死ぬるといふことだ。もちろん今回のこの戦いに負けるつもりなど毛頭ないけど」

「だから金剛安心しろ？ お前と共に沈んだ奴らはアメリカに恨みはあれどお前には感謝しかしてないと思うぞ？」

提督は私の顔を見て少し顔を柔らかくしてウィンクしてくれまし

た。

そして私をあやすかのように優しく言ってくれました。

「お前は沈んだ時の兵士の事で悩んでいたのだろう？さっきの質問といい、私が「君達と」と言った瞬間とかに少し反応してたから気付くことが出来たが…」

「…これじゃあ提督に嘘はつけないネー…」

「金剛お姉様にお悩みが☒言ってくれば私達も協力しますのに！」

「そうですねお姉様。私達は姉妹でしょう？困った時は4人で共有しましょう？そうすれば少しは気が楽になります」

「そうですね！どんな話でも榛名達はお姉様の力になります！」

「3人共……ありがとうネ……私……嬉しくて」

私は大泣きしてしまいました。四人の目の前で紅茶の味がしょっぱくなるくらいに。

「ただのお茶会がすごいことになったな…」

だがみんなの言う通りだぞ金剛？自分で解決できることなんてとつくに解決出来る。俺が困った時は迷わず君達艦娘に助けもろう。そして君達が困ったらすぐに私を呼んでくれ。すぐに駆けつけて力になってやる」

そういつて提督は私に手を差し伸ばしてくれました。私はあまり力が入らなかつたけれどもその手を握りました。

「ばい……センキューネみんな！おかげ元気が湧いてきたヨ！」

この後お茶会は終わり四人で今日の提督について様々なことを話し合いながらまた四人で眠りについた。

いつもの夢を見てしまったが最後の終わり方は暗い底にみんなと沈んだ先には提督が差し伸ばし私を光の方へ連れて行ってくれる世界には今生きるみんなが笑い合っている食堂に着きました。

「どうした金剛？みんなが待つてるぞ？」

「今行くネー！提督？私から目を離しちゃノーなんだからネー！」

私の地獄のような夢はその幸せが詰まった場所へ笑顔で駆けていく夢に変わっていった。

浜風は提督さんを尾行するそうです！

皆さん、こんにちは浜風です。

本日は午後から天龍さんを旗艦として遠征をするのでお昼を早めに食べてから歩いて鎮守府へ向かっています。お寺を曲がって坂を下ろうとしたら向かいに私服の提督が妖精さんを引き連れて坂を登って鎮守府から離れて行くのを見かけました。

私は鎮守府を行き来することしかしたことがないのでつい気になっけししまい提督について行ってみました。

?コツケコツコー／

!

鶏がいます！提督の後ろをついて行ったら鶏やヤギが何匹かいる場所がありました！そこで提督はヤギを飼っている？人とお話しをしているのを見かけました。ちなみに妖精さん達はヤギや鶏に乗って遊んでいました。

こんな所にヤギがいるなんて知りませんでした。

話が終わったみたいで提督はさらに奥へ進んで行きました。

階段や坂道があつて結構疲れました。少し息が上がってきたところで提督が立ち止まつて手を合わせてお祈りしているところを見かけました。

「浜風、私に着いてきてどうしたのか？」

「え！気付いていたんですか☒」

「妖精さん達が教えてくれてな、それで何か用事があつたのか？」

「いえ、どこに行くのか不思議に思つてついて来てしまいました…」

「いけないとわかつていたのですが…申し訳ありません…」

「別に怒っているわけではないさ、しかし次からはちゃんと私にすぐに言つてくれ」

「はい、わかりました。それで提督はなぜここにいらしたのですか？」

「ここはかつての戦争で亡くなった人への戦没者慰霊塔でな。食後の運動がてらにここにきてお祈りをしてんだ」

「なるほど…それなら私もします」

慰霊塔の方へ登り両手を合わせてお祈りを捧げました。

「ここは中〇公園とってな、私はよくこのあたりを散歩しているんだ、少し一緒に歩くか?」

「午後遠征までまだ時間がありますしいいですよ」

そこから一緒に提督とおしゃべりしながら散歩しました。

歩き始めたところで銅像をみつけました。

「提督この銅像はどなたですか?」

「この人はベントン・W・デッカー司令官だ。戦後の日本の為に援助などをしてくれた方でそのことへ敬意示すためにつくられたものだ」

「私達の近くにこんなものが…知りませんでした…」

「そうか…浜風達は今まで外に出ることなんて出来なかったからな…」

「なら少しついてきてくれ」

提督にそう言われ付いて行ったら博物館へ着きました。

「この中に入るぞ」

博物館の中に入るとゾウの骨が飾られていました。

「提督この骨はいつたいなんですか?」

「この骨はナウマンゾウの化石だよ」

化石を見つめていたら奥に他にも横須賀に暮らしている生き物の骨なども置いてありました。

「二階へ上がって行くと何かが置いてあるのが見えました」

「きやあー!なんですかこれは!?」

「驚いてしまったか…これは深海に生息する生物の標本だよ」

「すみません…大声を上げてしまって…提督はこれを見せたかったのですか?…だとしたら意地悪です」

私はジト目で提督を見ました。そしたら提督は少し困ったように優しく

「違うよ、見せたいものは他にある。だが少し驚かして見たかったんだが…まさかここまで驚くとは思ってなかったよ。すまなかったな」

「嫌です、許してあげません」

「まいったな…なら後で間宮券をあげるよ。それで許してくれないかい?」

「…わかりました。それで手を打ちましょう」

やりました。加賀さんではないですが気分が高揚します。

「それなら良かった。では本当に見せたいものはこっちだから着いてきてくれ」

また階段を下りてさらに奥へ進みました。そこには像や歴史のありそうな物もありました。

「浜風これを見てくれるか？」

「これは……私ですか？」

そこにはかつて私が軍艦だった時の模型が置いてありました。

「他にも模型ではないが陽炎など他の駆逐艦に関するものも置いてあるぞ」

「提督はなぜ私をここに連れてきたのですか？」

「私がここに浜風を連れてこなかったら浜風はここを知らなかっただろう？」

「確かにそうですが…それがどうしたのですか？」

提督の言い方が理解できなかつたのでつい強い言い方になってしまいました。

「浜風はここを知れて…銅像を知れてどう思った？」

「ここを知れて……楽しいです。標本を見て驚いて、日本の為に尽くしてくれた人を知れて、私達に関するものを見て」

「それは良かった。そしてこれは私からのお願いなんだがこのことをみんなに沢山広めてくれないか？」

「別にかまいませんが…何故ですか？」

「みんなにはもつと沢山の楽しいことを知ってもらいたいんだ。もし浜風がここに置いてある物に関する子達と一緒に来たらもつと楽しいだろう？」

そして浜風が驚いた所に教えたら面白いと思わないか？」

そういつて提督は私に微笑んでくれました。私はその顔を見たら顔を見たら照れてしまいそうだったので俯いてしまいました。

「そうですね…電ちゃんや暁ちゃんに見せたら面白そうですね」

私は少しニヤツとしながら自分の心を見せないように提督に言い



ました。

「それは泣いてしまうからやめてあげてくれ」

2人が驚いて気を失うのが頭に浮かんで笑ってしまいました。提督も同じ事を考えたのか一緒に声を出して笑っていました。

そのまま館内を一周して一緒に鎮守府に帰りました。今度誰と来るか話し合いながら

「そういえばあそこのヤギと鶏はなんですか？」

「あーあれは私が小さい頃からいるんだが最初は二頭しかいなかったのに子供を産んで増えたらしいぞ。鶏も飼い始めて卵が美味しいらしい」

「今度は私も話してみたいです」

「とても優しいご老人だからきつと世話もさせてくれるよ」

「ほんとですか☑楽しみです！」

鎮守府に行き遠征中に皆に博物館について話しました。皆興味津々で聞いてくれました。

余談ですが博物館の三階で女の子の悲鳴声が聞こえる噂ができた  
そうな

青葉見ちゃいました！提督と妖精さん達のオーケストラです！

明日はついに横須賀の市長と話し合いをする日だ。

私は明日の資料を作成するために執務室に残っていた。

「たにぐちさん！きょうのことわすれてないですよね？」

「あもちろんだ、忘れたりしないさ。君達も準備しておいてくれよ？」

「あたりまえです！ではきょうのよるに」

早めに仕事を終わらせなくてな…

|||||

！  
「どうも皆さん!!?青葉です！私は最近夜になると亡霊達の音楽が聞こえると言われたので姉妹の衣笠と一緒に張り込みをしています！

「ね〜青葉めんどくさいから帰ってもいい？」

「駄目ですよ衣笠！今回はスクープの匂いがして仕方ないんです！  
けっこう苦情もきてるから解決しないと」

「私じゃなくて古鷹や加古にお願いすればいいじゃない」

「加古はずっと寝てるし古鷹には明日は朝から鳥海と本買いに行くからごめんねって言われました」

執務室の方へ近づくと提督が部屋から出て行く所を見かけ話しかけました。

「提督！夜遅くまで何してたんですか？」

「ん？青葉と衣笠か…明日の資料作成をしていたんだ。お前達も何故自分達の部屋にいないんだ？」

「何かスクープの匂いがしたので！」

「青葉がずっとこう言ってきて私はその付き添い」

「なるほどな。もう暗いし外にはでるなよ？窓や部屋の鍵もかけろよ」

「はい！張り込むつもりなので問題ないです！」「ではな」

提督はそう言いながら外の方へ進んで行きました。しかし私は少し気になることがあったので衣笠に聞きました。

「ねえ衣笠？今の提督何か変じゃなかったですか？」

「そう？私達の身を気にしているようにしか聞こえなかったけど」

「そこですよ！駆逐艦相手ならまだわかりませんが…わざわざ私達にいうなんてまるで何かするから外に出るんじゃないぞみたいなの…」

「え〜青葉の考えすぎじゃない？けど張り込みするから部屋にはいられないわよね」

とりあえず青葉達は一度鎮守府の中を一周することにしました。

「ねー青葉。あれって妖精さん達よね？」

一階を歩いているとそこにはゾロゾロと妖精さん達が何かを持ちながら同じ方向に向かってるのが見えました。

「持ち上げてるのは楽器かしら？それにしても多いわね…」

「怪しいですねえ…尾行してみますか！」

「え、大丈夫かな？バチとか当たらないよね？」

「たぶん大丈夫ですよ！たぶん？」

「なんで最後疑問形なの☒」

抜き足差し足忍び足でついていくと妖精さん達は自分サイズの人用の楽器を運んで海の前でセットしていた。

「何これ？何が始まるの？怖いんですけど！」

「録画できるやつ持ってきてよかったです！」

え、衣笠！あそこにいるの提督ですかね？」

二人でコソコソ話合っていると制服を着た提督が妖精さんの集まりに向かっていった。

「しかも勲章や手袋も付けてるじゃない。なんで式典とかに出る格好なんだろう？」

「これはとんでもないスクープですよ！そろそろ録画し始めないと」

提督が妖精さん達が運んでいたピアノの椅子に座りバイオリンを持ち始めました。そして他の妖精さん達も各々の楽器を持ち上げ始めました。

「なんか演奏するつもりなのかな？それにしてもすごい人数ね…」

あ！あそこにいるの提督とここに来た3人じゃない！あの3人が指揮者なんだ…」

「衣笠静かにしてください！もう録画始めてるんですから！」

三人の妖精さんが指揮棒を取り三方向に構えた。その瞬間に一斉に提督と全ての妖精さんが向き始め演奏が始まりました。

最初はゆつくりと提督のピアノから始まりました。そして少しずつ妖精さん達も弾き始めました。

「とても優しい演奏ね青葉」

「静かに！今撮ってますから」

「あなた…ほんと撮影に命賭けてるわね…」

真ん中の妖精さんが指揮を振ろうとする瞬間に提督はピアノからバイオリンに楽器を替えて演奏していました。

まだ春なので夜桜が舞い、まるで提督達の演奏を聞きに来てるような雰囲気でした。

とても幻想的で夢を見ているような…少しうつとりしてしまいましたが衣笠を見ました。

「凄い綺麗…嫌々でついてきたけどいいのがみれたわ」

とても満足した顔で聞き惚れていました。

演奏が終わ理想になると今度は提督が指揮台に立ち上がり妖精さん達を見渡します。

「今回みんな集まってくれてありがとう。さっきまではこれから繰り広げられる闘いへの我々の意気込みと一応の敵への敬意だ。そしてこれから弾くのは闘いの中で沈んでしまった仲間達…そしてこれから海へ向かっていく艦娘達へ送る演奏だ。誰も聞いていない…誰も知らない…だが私達が知っている…そんな演奏をここで残し気合いを入れよう！」

全ての妖精さんが手を上げて同意していました。

提督さんは私達の：艦娘達へ捧げるために演奏していたのですね。隣で衣笠は嬉しすぎて泣きじやくっています。

しかし困りますねこれでは新聞に載せずらいです。

提督が指揮を振り演奏が始まりました。今度の演奏は儂く弱々しいです。それなのにとても心地よく眠くなります。

夜桜から次は海に月の光が差しています。ゆつくりとピアノ部隊が演奏しそこにひっそりときそうバイオリンとバス部隊がいます。

私達への感謝や沈んでしまっていく子達への悲しみ、さまざまな感情がこの曲に寄せられているのがわかりました。

全部で20分近くで終了した演奏は終わり提督さんが終わりの合図を出していました。

「これで終わりだが皆の為に菓子を用意した。食堂にあるから各自自分の楽器を片付けてから向かってくれ！もちろん、お菓子を食べてからの楽器の手入れは怠らないように！解散！」

「不味いですよ衣笠！早くここから出ないと気付かれますよ！」

「待つてよあおば〜」

青葉達はすぐに避難して部屋に戻りました。

外でガサゴソいつてる音がする中このことを伝えるべきか悩んでいます。

「これを新聞にはしづらいですねーどうしましょうか」

「私達の宿舎の食堂で流すのはどうかしら？提督には気付かれないはずじゃない？」

「それです衣笠！そうしましょう！」

そして一週間後に編集した提督のオーケストラを流しました。皆さん演奏にとても喜んでいましたが食堂にいる妖精さんに告げ口され後日執務室に呼ばれました…